年　報

―令和元年度―

2020

大磯町郷土資料館

OISO MUNICIPAL MUSEUM

はじめに

令和元年度大磯町郷土資料館年報を刊行いたします。

令和元年度は、いつになく災害に見舞われた年となりました。10月12日、13日は台風19号襲来のため、郷土資料館･旧吉田茂邸とも二日間臨時休館しました。台風襲来を理由とした臨時休館は、郷土資料館開館以来、初めてのことです。郷土資料館職員も町職員として、避難所の開設に従事しました。地球温暖化により、日本を通過する台風が強大化することが予測されます。今後、このような対応が常態化するのかと感じた矢先に、新型コロナウイルスの感染が拡大し、3月7日から臨時休館を余儀なくされました。新型コロナウイルス感染拡大防止への対応は、臨時休館に伴い、主催する講座等を中止にせざるを得ず、令和2年度の行事にも影響が出ている状況です。

旧吉田茂邸も開館から3年が経ち、今後の運営について本格的に検討する時期になりました。明治記念大磯邸園の整備も含め、大磯町の文化資源としてどのように活用していくのが望ましいのか、そしてその活用が持続できるのか、問われています。

台風19号では、県内の川崎市市民ミュージアムの収蔵庫が水没し、甚大な被害を受けました。社会を脅かす災害が想定される中、博物館活動をどのように行うのか、当館も自分事として、事業を検討していかなければなりません。引き続き、当館の事業にご理解・ご協力をお願いいたします。

大磯町郷土資料館

目　次

〔事業報告〕
大磯町郷土資料館運営 …… 4
・組織および職員 …… 4
・協議会 …… 4
・予算 …… 4
・観覧者数 …… 5
大磯町郷土資料館施設管理 …… 6
・維持管理 …… 6
・施設使用 …… 6
旧吉田茂邸（郷土資料館別館）施設管理 …… 6
・維持管理 …… 6
・施設使用 …… 6
大磯町郷土資料館学芸活動 …… 7
・企画展 …… 7
・学級・講座 …… 8
・博物館実習 …… 9
・研究活動 …… 10
・博物館資料の整備 …… 10
・刊行物 …… 12
・視察・見学対応 …… 12
・取材対応 …… 12
・ホームページを活用した情報発信 …… 12
・博物館資料の収集、整備、利用 …… 13
・文献資料収集状況 …… 15
旧吉田茂邸（郷土資料館別館）学芸活動 …… 17
・ミニ企画展 …… 17
・展示解説・講演会 …… 18
・決断に特化した旧吉田茂邸独自イベント …… 19
・博物館資料の整備 …… 20
・調度品等の整備 …… 20
・刊行物 …… 20
・視察・見学対応 …… 21
・取材対応 …… 21
学芸員の調査、研究、普及活動 …… 21

〔研究報告〕
菊池重三郎と馬籠
伊藤　匠 …… 26

大磯地区に於ける本土決戦期の遺構調査Ⅱ
市原　誠 …… 31

【資料紹介】吉田茂宛竹内綱書簡
久保庭　萌 …… 39

事　業　報　告

大磯町郷土資料館運営

■ 組織および職員

教　育　長 ― 教育部長 ― 生涯学習課長 ― 郷土資料館

野島 健二　　仲手川 孝　　波多野 昭雄　　館長　國見 徹

主任主事／学芸員　富田三紗子
主　　事　　　　　池田知與子
主　　事／学芸員　久保庭　萌
主 事 補／　　　　齋藤亜矢子

参事（歴史・文化担当）
佐川　和裕

参与（旧吉田茂邸担当）
柴田　明彦

臨時職員／学芸員	鈴木　一男、飯野　友紀、中原　園子、伊藤　匠、村田　聡美、鈴木　千津（-R1/5/31）、温水　基輝（R1/8/1-）
臨時職員／司書	今井沙穂里
臨時職員／自然観察指導員	高山　優美
臨時職員	川下多恵子、佐藤　瑞香、鈴木　道子、名取　淳子、西田　裕子、花輪　弘枝、若栗　尊子

■ 協議会

<委員の構成>

・委 員 長／　近藤　英夫（学識経験者）
・副委員長／　西川　武臣（学識経験者）
・委　　員／　柴田　紳一（学識経験者）、古川　元也（学識経験者）、秋山　実（学校教育関係者）、中島　美江（社会教育関係者）、大倉　祥子（観光関係者）、曽根田玲子（観光関係者）、上野　広子（社会教育関係者）

<協議会の開催>

・第 1 回／令和元年 6 月 11 日　議題 1　平成 30 年度事業報告について
　議題 2　令和元年度事業進捗状況について
　議題 3　旧吉田茂邸の指定管理の検討状況について
・第 2 回／令和元年 11 月 19 日　議題 1　令和元年度事業進捗状況について
・第 3 回／令和 2 年 3 月 10 日　議題 1　令和元年度事業進捗状況報告について
　議題 2　令和 2 年度事業計画について

■ 予算

<当初予算の推移>

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
金額	200,095 千円	512,125 千円	147,274 千円	84,551 千円	98,941 千円	92,462 千円

<令和元年度歳入決算額（一部のみ）>

・旧吉田茂邸観覧料　17,444,950 円
・旧吉田茂邸刊行物売上代　169,020 円
・吉田茂関連製品売上代　122,660 円
・郷土資料館刊行物売上代　176,720 円

<令和元年度歳出決算額>

事業	郷土資料館 運営事務事業	郷土資料館 維持管理事業	郷土資料館 学芸活動事業	教育普及・ 企画展事業	
金額	1,746,825 円	15,535,224 円	7,257,351 円	997,930 円	
事業	旧吉田茂邸 運営事務事業	旧吉田茂邸 維持管理事業	旧吉田茂邸 学芸活動事業	旧吉田茂邸 研修等事業	計
金額	8,590,242 円	7,159,457 円	2,908,295 円	441,207 円	44,636,531 円

□職員給与（5 人分）　31,057,451 円　■歳出合計　75,693,982 円

■ 観覧者数

＜郷土資料館観覧者数の推移＞ 単位：人、日

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	累計（昭和 63 年～）
入館者数	25,673	17,862	35,826	28,900	22,201	982,169
1 日平均／開館日数	91 ／ 283	149 ／ 120	122 ／ 294	97 ／ 299	82 ／ 271	111 ／ 8,872

※平成 28 年度は平成 28 年 11 月 2 日まで展示リニューアル工事のため休館
※令和元年度は令和元年 10 月 12 日、13 日を台風 19 号のため、令和 2 年 3 月 7 日から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時休館

＜郷土資料館の月別観覧者数＞ 単位：人

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	
入館者数	2,425	3,745	1,611	1,033	1,308	1,511	
1 日平均	97	139	64	52	50	63	
	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
入館者数	2,607	2,655	1,584	1,529	1,971	222	22,201
1 日平均	109	106	66	66	82	56	82

※令和元年 10 月 12 日、13 日を台風 19 号のため、令和 2 年 3 月 7 日から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時休館

＜旧吉田茂邸（郷土資料館別館）の月別観覧者数＞ 単位：人

		4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	
観覧者数	大人 (個人)	2,993	5,193	2,617	1,558	1,316	1,722	
	大人 (団体)	773	1,511	1,559	685	78	889	
	中学生・高校生 (個人)	36	61	5	13	32	4	
	中学生・高校生 (団体)	0	0	0	0	0	0	
	小学生以下	69	304	28	48	85	41	
	障がい者／介護者	153	210	110	69	38	63	
	減免対象者	170	54	59	69	48	18	
計		4,194	7,333	4,378	2,442	1,597	2,737	
1 日平均		161	272	175	98	61	114	
		10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
観覧者数	大人 (個人)	2,097	2,999	1,370	1,359	2,402	264	25,890
	大人 (団体)	1,953	1,466	387	248	358	0	9,907
	中学生・高校生 (個人)	7	12	9	9	18	3	209
	中学生・高校生 (団体)	0	0	0	0	0	0	0
	小学生以下	44	88	25	28	64	12	836
	障がい者／介護者	87	164	68	66	131	8	1,167
	減免対象者	35	47	24	15	207	0	746
計		4,223	4,776	1,883	1,725	3,180	287	38,755
1 日平均		176	191	82	75	138	72	141

※令和元年 10 月 12 日、13 日を台風 19 号のため、令和 2 年 3 月 7 日から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時休館

大磯町郷土資料館施設管理

■ 維持管理

＜委託業務＞

・清掃委託／(株) 湘南県央サービス
・警備委託／(株) 全日警 横浜支社
・昇降機保守委託／ダイコー (株) 横浜営業所
・敷地管理委託／(財) 神奈川県公園協会
・空調機器給水設備保守委託／扶桑工業 (株)
・自家用電気工作物保守委託／荻野電気管理事務所
・消防用設備保守委託／(株) 足柄防災 大磯営業所
・自動ドア保守委託／(株) 神奈川ナブコ 厚木支店

＜修繕＞

・空調機修繕／扶桑工業 (株)
・研修室扉修繕／(有) 山本建設
・除湿機排水ドレン管修繕／扶桑工業 (株)

＜工事＞

・中央監視装置工事／日本電技 (株) 横浜支店

■ 施設使用

＜施設使用月別件数＞

単位：団体

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
研修室	7	12	7	7	7	4	9	11	9	6	5	0	84

※令和２年３月７日から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時休館

旧吉田茂邸（郷土資料館別館）施設管理

■ 維持管理

＜委託業務＞

・清掃委託／高橋産業 (株)
・警備委託／(株) 全日警 横浜支社
・昇降機保守委託／(株) 日立ビルシステム 横浜支社
・空調機器給水設備保守委託／扶桑工業 (株)
・消防用設備保守委託／モリタ宮田工業 (株)
・敷地管理委託／(財) 神奈川県公園協会

＜修繕＞

・流し台防臭修繕／扶桑工業 (株)

■ 施設使用

＜施設使用月別件数＞

単位：団体

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
全　館	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
和　室	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
金の間	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
食　堂	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
研修室	2	2	2	3	0	1	3	1	0	2	2	0	18

※令和２年３月７日から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時休館

大磯町郷土資料館学芸活動

■ 企画展

企画展「吉田茂新収蔵資料展」

期　　間／平成 31 年 4 月 27 日（土）～令和元年 6 月 23 日（日）
開場日数／ 50 日間
会　　場／郷土資料館　企画展示室
出品点数／約 70 点
料　　金／無料
観覧者数／ 5,520 人
趣　　旨／旧吉田茂邸の公開をきっかけとして、吉田茂に関する資料の寄贈が増えたが、新しく寄贈いただいた資料の中には、まだ一般に公開していないものが多い。新たに収蔵した吉田茂関係資料の初公開を目的として、収蔵品展を行う。
内　　容／
（1）吉田茂と書道（全日本書道連盟と豊道春海関連資料）
吉田が初代会長を務めた全日本書道連盟関連資料および同連盟の初代理事である豊道春海関連資料を展示。
（2）吉田家旧蔵資料
吉田家が所蔵していた吉田茂ゆかりの品々を紹介。昭和天皇御大礼時に吉田が着用した装束や牧野伸顕・竹内綱らから吉田茂に宛てられた書簡、勲章・辞令など。
（3）その他新着資料
その他、様々なところから寄贈・寄託を受けた資料を展示。日本国憲法草案や国葬記念メダル、吉田茂直筆の書や書簡など。
（4）吉田茂関連写真資料
吉田家が所蔵していた写真を中心に展示。主として外交官・政治家時代の吉田茂を取り上げた。
（担　当）久保庭

秋季企画展「鴫立庵」

期　　間／令和元年 10 月 12 日（土）～ 12 月 8 日（日）
開場日数／ 47 日間
※ 10 月 12 日、13 日は台風 19 号のため臨時休館
会　　場／郷土資料館　企画展示室
出品点数／約 100 点
料　　金／無料
観覧者数／ 5,344 人
趣　　旨／町内にある俳諧道場「鴫立庵」は、江戸時代に崇雪という人物が庵を創設し、大淀三千風が俳諧道場として利用してから現在まで、地域の文化施設として維持されてきた。本展示では、江戸時代以来鴫立庵に伝えられ、現在、郷土資料館が所蔵する鴫立庵関係資料を、一挙公開することを目的とし、歴代庵主の事蹟を追うことによって、時代によって変化した鴫立庵の役割や、鴫立庵と地域の関係を考察する。
内　　容／
（1）鴫立庵のはじまり
崇雪から始まり、1 世庵主大淀三千風の時代までを紹介。崇雪が最初に西行の歌にちなんで庵を結び、諸国を行脚していた三千風が請われて庵主となって以降、俳諧道場として現在に続く鴫立庵が誕生したことを解説した。崇雪や三千風に関する書画などを、主に鴫立庵資料から展示した。
（2）中興の祖―白井鳥酔
三千風の没後、鴫立庵は一時衰退を見たが、白井鳥酔が 3 世庵主となったことにより再興された。鳥酔の入庵によって、鴫立庵は以後、芭蕉系の庵主が就任することとなった。江戸時代の鴫立庵について解説し、鴫立庵資料の中から、主に雉啄に関する版本や書画を展示した。
（3）鴫立庵と近代化―地域とのつながり
明治時代になると、江戸時代に続いていた芭蕉系の庵主は途絶え、鴫立庵も新たな時代を迎えた。それは、江戸時代に芭蕉をピークに発達した俳諧が、大衆化することによって衰退し、そして正岡子規

を迎えて「俳句」という文学に進展するという流れの影響によるものでもあった。明治時代以降の庵主について、特に原昔人や神林時処人を取り上げ、鴫立庵資料の中から関連資料を展示した。
（4）18 世庵主鈴木芳如の活躍
戦中・戦後期に庵主を務めた者は、鴫立庵史上初の女性庵主であった鈴木芳如であった。芳如は俳諧にかかわる活動だけでなく、鴫立庵の歴史を見直し、地元「大磯」の文化事業にも積極的に関わった。芳如の活動を、鴫立庵資料や鈴木芳如関係資料（寄託資料）などを中心に紹介した。

〔関連行事〕

展示解説

期　　日／
〔第 1 回〕令和元年 10 月 13 日（日）、〔第 2 回〕11 月 10 日（日）、〔第 3 回〕11 月 24 日（日）
会　　場／郷土資料館　企画展示室
参加人数／〔第 1 回〕台風 19 号による臨時休館のため中止〔第 2 回〕10 人〔第 3 回〕約 20 人
内　　容／担当学芸員が企画展示の内容を 30 分程度で解説した。
（担　当）富田・伊藤

大磯自然発見コーナー

趣　　旨／大磯町内で採集できる自然資料などを館内に展示し、自然観察の参考となる情報を提供する。自然環境に関心を高めるきっかけつくりにつなげる。

〔第 1 回〕「どんぐりの見分け方　－外を歩けばどんぐりがいっぱい。さて何のどんぐり？－」

期　　間／令和元年 11 月 22 日（金）～ 12 月 27 日（金）
出品点数／約 6 点
内　　容／大磯町内で身近に観察できるどんぐりを紹介した。展示したどんぐりは手に取ってじっくり観察できるようにし、並べてそれぞれの特徴を伝えることでより違いを感じられるようにした。また、『城山公園どんぐりマップ』を観察に活用できる資料として持ち帰れるように設置し、展示を見た後実際に落ちているどんぐりを見に行きたくなる展示を目指した。

〔第 2 回〕「大磯の自然を知ろう　ようこそ海の森へ」

期　　間／令和元年 12 月 28 日（土）～令和 2 年 4 月 7 日（火）
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和 2 年 3 月 7 日から臨時休館
出品点数／約 11 点
内　　容／大磯照ヶ崎海岸にも立派な海中林が存在する。海の森の存在を知るきっかけとして、身近に食べている青のりやところてんの原料などを中心に海藻おしば標本を展示し、海中の森の様子は写真で紹介した。春～初夏の海岸散歩の自然観察のヒントとなることを目的とした。
（担　当）高山・村田

■ 学級・講座　※ 2 月 28 日以降は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

＜古文書裏打クラブ＞

期　　日／平成 31 年 4 月 20 日（土）、令和元年 5 月 18 日（土）、6 月 22 日（土）、7 月 20 日（土）、8 月 17 日（土）、9 月 21 日（土）、10 月 19 日（土）、11 月 16 日（土）、12 月 21 日（土）、令和 2 年 1 月 18 日（土）、2 月 22 日（土）
場　　所／郷土資料館　研修室
講　　師／鵜飼レイ子氏、中村ふぢ氏、吉原悦子氏
参加人数／延 100 人
内　　容／裏打ちの技術を学びながら、当館で所蔵している古文書の裏打ちを行うワークショップ。博物館資料の整理というボランティア的な性格をもつ活動として位置づけ、平成 16 年度から継続している。活動内容は、昨年度に引き続き、襖に下張りされていた古文書の資料化を進めた。
（担　当）富田・伊藤

＜古文書解読クラブ＞

期　　日／平成 31 年 4 月 6 日（土）、令和元年 5 月 4 日（土）、6 月 8 日（土）、8 月 3 日（土）、9 月 7 日（土）、10 月 5 日（土）、11 月 2 日（土）、12 月 7 日（土）、令和 2 年 1 月 5 日（日）、2 月 8 日（土）
場　　所／郷土資料館　研修室

参加人数／延 108 人
内　　容／郷土資料館が所蔵する古文書を会員と共に解読することにより、大磯の歴史を学び、古文書資料の活用を図ることを目的として、平成 24 年度から毎月第一土曜日を原則として活動を始めた。町指定文化財である大磯宿小島本陣資料の休泊帳を解読し、翻訳文を刊行することを目指している。また、引き続き、会員有志で毎週金曜日の活動を行い、大正期の大磯町の助役日誌を解読している。今年度は新規会員を３名募集し、３名が入会した。

〔関連行事〕

歴史講座「大磯町助役日誌を読む―よみがえる 100 年前の大磯―」

期　　日／令和２年２月 16 日（日）
場　　所／郷土資料館　研修室
講　　師／富田三紗子（当館学芸員）、古文書解読クラブ会員
参加人数／ 18 人
内　　容／毎週金曜日の会で解読した、大正時代の大磯町助役の日誌の解読文の一部（大正４年 10 月から大正５年 12 月分）を資料館資料 18 として刊行し、その内容を報告するために、歴史講座を開催した。初めに、担当学芸員から日誌の概要と解読クラブの活動内容を説明し、解読クラブの会員から、ブリ漁、郡役所移転問題、衛生事務、戸籍など、日誌の内容を報告した。

（担　当）富田・伊藤

＜写真整理クラブ＞

期　　日／平成 31 年４月 14 日（日）、４月 28 日（日）、令和元年５月 12 日（日）、５月 26 日（日）、６月 16 日（日）、６月 30 日（日）、７月 14 日（日）、７月 28 日（日）、８月 11 日（日）、８月 25 日（日）、９月 15 日（日）、９月 29 日（日）、10 月 27 日（日）、11 月 10 日（日）、12 月 15 日（日）、令和２年１月 12 日（日）、１月 26 日（日）、２月２日（日）、２月 16 日（日）
場　　所／郷土資料館　研修室
参加人数／延 84 人
内　　容／郷土資料館が所蔵する写真を会員と共に整理し、資料の活用を図ることを目的として、平成 28 年度から毎月第二、第四日曜日を原則として活動を始めた。活動内容としては、『広報おおいそ』担当者が撮影した写真のフィルムをスキャンし、デジタル化した。また、必要に応じてフィルムの清掃を行った。今年度は、ネガフィルム全 27 冊の内、６冊目（資料番号 N6）までのフィルムをデジタル化した。
（担　当）富田・伊藤

＜海の教室＞

楽しい海藻おしばづくり

期　　日／令和元年 10 月 26 日 (土)
場　　所／郷土資料館　研修室
講　　師／高山優美（当館臨時職員）、長島美保（海の森クラブ会員）
参加人数／９人
内　　容／特定の学問分野にかかわらず「海」をテーマに様々なことを体験し、楽しみながら海岸環境や海産生物についての知識を深めることを目的に平成 12 年度から実施している。令和元年度は海藻おしばづくりの講座を実施した。
（担　当）高山

■ 博物館実習

令和元年度は３大学より３名の学生を受け入れた。実習期間は９月３日から９月 14 日の間（９月８日・９日を除く）及び７月 26 日（事前ガイダンス）、９月 27 日（課題等提出）の計 12 日間とした。

実習課程は、例年のとおり、１週目に資料整理などの実務的な作業、２週目に企画から列品までを行う展示作業とした。展示作業では、郷土資料館の廻廊に掲示する展示ポスターを作成した。実習生自らが決めた「大磯の伝導者たち」をテーマとして、９月 28 日から 12 月８日まで掲示した。

＜実習生＞

加藤沙耶果（日本大学）、笹本尚之（東京農業大学）、菊地康之（鶴見大学）

<課程>

月日	曜日	午前	午後
7月26日	金		ガイダンス／館内見学
9月3日	火	講義（博物館活動の概要）	町内施設・史蹟等見学
9月4日	水	旧吉田茂邸受付業務	吉田茂関係資料整理
9月5日	木	常設展示室展示替え（歴史資料の展示）	
9月6日	金	資料梱包	資料梱包／特殊資料の取り扱い
9月7日	土	講義（教育普及活動の概要）	古文書解読クラブに参加／ポスター展示の作業
9月10日	火	展示替実習（ポスター展示作成）	
9月11日	水	展示替実習（ポスター展示作成）	
9月12日	木	展示替実習（ポスター展示作成）	
9月13日	金	展示替実習（ポスター展示作成）	
9月14日	土	展示替実習（ポスター展示作成）	
9月27日	金		展示替実習（ポスター展示掲示）

（担　当）富田・久保庭・國見

■ 研究活動

戦時中の大磯に関する調査

期　　日／平成31年4月11日（木）、令和元年5月14日（火）、6月18日(火)、11月13日（水）、12月20日（金）、令和2年1月16日（木）・22日（水）、3月19日（木）・31日（金）

内　　容／平成27年に終戦70年を迎え、戦争の記録が失われつつある中、大磯の戦時中の状況を把握することを目的として、平成28年度から調査を始めた。調査内容は、町内で空襲などの戦争を体験された方に対する聞き取り調査及び町内に築かれた防空壕などの実測調査、その他必要な調査である。本年度は、空襲などの体験に関する聞き取り調査において、2人の方にご協力いただいた。また、大磯駅裏に所在する特殊地下壕（防空壕）の実測調査を行った。調査にあたっては当館職員の他、市民協力者として、市原誠氏、藤田尚志氏にご協力いただいた。

（担　当）富田・久保庭

■ 博物館資料の整備

<資料整備委託>

木造神像保存処理委託

業務内容／町指定有形文化財木造神像11躯のうち、1躯について保存処理を行う。

契約期間／平成30年5月8日～令和2年1月31日

請 負 者／光圓美術研究所

<歴史資料の整理>

歴史資料については、開館以来、長期にわたって専門の担当者が不在であったこともあり、未整理資料が膨大に収蔵されている現状にある。平成30年度から、これらの資料を総括し、段階的に整理することとした。本年度は、次のとおり整理を進めた。

文献資料（古文書等）

・大磯町史編纂時の整理済資料も含め、再調査及び整備を行った。受入番号 2004-1107 まで完了。

受入番号	資料群名	点数	受入番号	資料群名	点数
0000-0002	三家混合資料	376	1988-1208	鈴木昇家旧蔵資料	1
0000-0003	高麗資料	53	1989-0107 他	大内満家旧蔵資料	33
0000-0004	中川良知家旧蔵資料	113	1989-0407	加藤春雄家旧蔵資料	4
0000-0005	熊沢紋一郎家旧蔵資料	147	1989-0509	鈴木博家旧蔵資料	26
0000-0006	出口藤江家旧蔵資料	260	1989-1201	今村清家旧蔵資料	1
0000-0007	石井文蔵家旧蔵資料	156	1989-1206 他	細井豊家旧蔵資料	236
0000-0010	脇正男家旧蔵資料	50	1990-0203	鈴木春香家旧蔵資料	141
0000-0012	中郡水産会資料	82	1990-1002	後藤雅夫家旧蔵資料	4
0000-0013	飯田光明家旧蔵資料	41	1991-0705	渡辺広平家旧蔵資料	16
0000-0014	望月半兵衛家旧蔵資料	27	1991-0707	橘継夫家旧蔵資料	371
0000-0015	植田謙吉家旧蔵資料	6	1991-0801	小田島藤雄家旧蔵資料	71
0000-0017	豊田由登家旧蔵資料	403	1991-0902	加藤和夫家旧蔵資料	55
0000-0025	渡辺定雄家旧蔵資料	14	1992-0427	加藤文八家旧蔵資料	3
0000-0027	飯田政尚家旧蔵資料	1	1992-0502	香川武彦家旧蔵資料	15
0000-0028	中里てふ家旧蔵資料	1	1993-0401	木村純子家旧蔵資料	2
0000-0031	岩田一彦家旧蔵資料	4	1994-0202	飯田福信家旧蔵資料	1
0000-0033	船橋ユキ家旧蔵資料	300	1994-0301	木村純子家旧蔵資料	3
0000-0034	井上家旧蔵資料	45	1994-0418	庄野悦子家旧蔵資料	23
0000-0035	今村家旧蔵資料	24	1994-0501	国府本郷地域資料	157
0000-0036	安井小弥太家旧蔵資料	7	1994-0903 他	原恒之家旧蔵資料	190
0000-0053	加藤文子家旧蔵資料	643	1994-1004	加藤英雄家旧蔵資料	1
0000-0055	不明家Ｉ資料	40	1995-0204	効能書『官許　通閑散』	1
0000-0069 他	曽根田重和家旧蔵資料	784	1995-1003 他	西海誠家旧蔵資料	39
1965-0101	小島本陣資料	946	1996-0502	茶寮あら井跡資料	46
1983-1002 他	安部川征彦家旧蔵資料	110	1996-0604	山口進家旧蔵資料	1
1985-0203	平林俊吾家旧蔵資料	59	1996-1208	大日本温泉一覧	1
1985-0401 他	渡辺美代家旧蔵資料	13	1997-0206	木村純子家旧蔵資料	2
1985-0801 他	竹内正雄家旧蔵資料	3	1998-0905	西山敏夫家旧蔵資料	58
1985-1101	渡辺光彦家旧蔵資料	13	1999-1002	伊東宗兵衛家文書	368
1986-0902	高橋誠一郎家旧蔵資料	64	2000-0308 他	加藤登思枝家旧蔵資料	49
1986-1002	渡辺美代家旧蔵資料	1	2000-0425	松下敏明家旧蔵資料	20
1986-1202	峯尾倫子家旧蔵資料	9	2001-0506	二宮松汀関係資料	44
1987-0301	土屋隆夫家旧蔵資料	100	2001-0705	鈴木喜八郎家旧蔵資料	127
1987-0303	白根光男家旧蔵資料	1	2002-0501	杉谷一子家旧蔵資料	1
1987-0404	亀高信夫家旧蔵資料	117	2002-1206	木村純子家旧蔵資料	1
1987-0603 他	関野好一家旧蔵資料	28	2003-0301	中村千代家旧蔵資料	83
1987-1005	吉川忠男家旧蔵資料	1	2003-0403	千野英子家旧蔵資料	29
1988-0801	五島八左衛門家旧蔵資料	10	2003-0603	椎野スエ家旧蔵資料	3
1988-0806 他	吉田茂治家旧蔵資料	5	2004-1101	加藤廣美家旧蔵資料	79
1988-1001	環境清掃課採集資料	28	2004-1107	鈴木昇家旧蔵資料	3

コレクション資料

・吉田茂関係資料を新たに 168 点購入及び受け入れ、所蔵点数が 3,340 点になった。

・吉田茂関係資料の内、吉田家旧蔵資料（受入番号 2017-0309）の書簡の管理用の目録を作成した。総点数 523 点。

・別荘関係資料を新たに 1 点受け入れ、所蔵点数が 254 点になった。

・城山荘関係資料を新たに 1 点受け入れ、所蔵点数が 168 点になった。

・島崎藤村関係資料を新たに 1 点受け入れ、所蔵点数が 131 点になった。

美術品

・銃砲刀剣類を新たに 11 点受け入れ、所蔵点数が 51 点になった。

・ホームページの収蔵資料データベースにて、所蔵する浮世絵の内 14 点の画像を公開した。

寄託資料

・次の資料を整理し、管理用の目録を作成した。

番号	資料群名	点数
17	菊池重三郎関係資料	1,510
30	西小磯東西部落資料	61

絵葉書
・新たに 15 点購入し、所蔵点数 915 点になった。
・大磯に関するもののみ、ホームページの収蔵資料データベースにて画像を公開した。公開した画像の件数は、27 シリーズ。
（担　当）富田・久保庭・飯野・鈴木千・中原・温水・伊藤

■ 刊行物

＜図録・冊子＞

・『年報－平成 30 年度－』	A 4 判 40 頁 400 部（令和元年 8 月刊）
・企画展図録『鴫立庵』	A 4 判 40 頁 800 部（令和元年 10 月刊）
・資料館資料 18『大磯町助役日誌』	A 4 判 108 頁 500 部（令和 2 年 1 月刊）
・企画展図録『大磯別邸城山荘』（2 刷）	A 4 判 48 頁 500 部（令和 2 年 2 月刊）
・『Report －大磯町郷土資料館だより』40	A 4 判　8 頁 800 部（令和 2 年 3 月刊）

＜チラシ・パンフレット＞

・企画展『吉田茂新収蔵資料展』チラシ	A 4 判両面 10,000 部（平成 31 年 4 月刊）
・秋季企画展『鴫立庵』チラシ	A 4 判両面 10,000 部（令和元年 9 月刊）
・歴史講座『大磯町助役日誌を読む』チラシ	A 4 判片面 700 部（令和 2 年 1 月刊）

■ 視察・見学対応

＜視察・見学の月別件数＞　　　単位：団体

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
視察	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
見学	1	1	1	1	0	0	2	0	0	0	2	0	8

※令和 2 年 3 月 7 日から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時休館

＜視察対応＞　館職員が対応した団体のみ記載
・茅ヶ崎市文化資料館／ 7 月 24 日／ 2 人（久保庭）

＜見学対応＞　館職員が対応した団体のみ記載
・二宮町図書館／ 6 月 4 日／ 8 人（久保庭）
・ダイヤ小田急線友会／ 7 月 9 日／ 30 人（久保庭）
・鎌倉淡青会／ 10 月 24 日／ 30 人（富田）

■ 取材対応

＜刊行物＞
・タウンニュース　令和元年 5 月 17 日掲載「大磯町郷土資料館　初公開の品も多数　吉田茂ゆかりの新資料展」（久保庭）
・神奈川新聞　令和元年 5 月 24 日掲載「企画展「吉田茂新収蔵資料展」について」（久保庭）
・読売新聞　令和元年 6 月 18 日掲載「陸奥宗光邸について」（久保庭）
・埼玉新聞　令和元年 8 月（掲載日未詳）「鈴木久五郎について」（富田）
・河出書房新社　令和元年 8 月（刊行日未詳）「戦時中の大磯について」（富田）
・神奈川新聞　令和元年 10 月 18 日「秋季企画展「鴫立庵」について」（久保庭・富田）
・タウンニュース　令和 2 年 1 月 24 日掲載「100 年前の大磯鮮明に」（富田）
・タウンニュース　令和 2 年 1 月 31 日掲載「大正の大磯を知る」（富田）

＜テレビ＞
・NHK『歴史秘話ヒストリア（令和元年 6 月 26 日放送）』「陸奥宗光」（久保庭）
・毎日放送『ちちんぷいぷい（令和元年 7 月 18 日放送）』「昔の人は偉かった」（富田）
・NHK『美の壺（令和元年 7 月 19 日放送）』「日本の避暑地スペシャル」（久保庭）
・湘南ケーブルネットワーク（令和元年 10 月 10 日対応／放送日未詳）「スタンプラリー「おおいそめぐり」の紹介」（富田）

■ ホームページを活用した情報発信

＜ホームページの更新＞休館情報などは除く

平成 31 年 4 月 24 日	「旧吉田茂邸×産業能率大学プロジェクト」のページを公開
令和元年 7 月 19 日	収蔵資料データベースのページを公開
令和元年 10 月 14 日	旧吉田茂邸紹介動画公開

令和２年１月１日　　　　　　「100 年前の大磯～小見助役の一日～」公開

＜ブログの更新＞

・年間を通して、郷土資料館は 16 回、旧吉田茂邸は 10 回更新した。

＜ SNS の利用＞

・twitter は、年間を通して 72 回投稿し、869 件の反応があった。フォロワー数は 1,085 件。
・facebook は、年間を通して 74 回投稿し、363 件の反応があった。フォロワー数は 84 件。
・インスタグラムは、年間を通して 31 回投稿し、367 件の反応があった。フォロワー数は 50 件。
※フォロワー数は、令和２年４月 18 日確認。

■ 博物館資料の収集、整備、利用

＜寄贈資料＞

No.	受入年月日	資料名	数量	受入先
2019-0401	H31.4.16	鉛筆画　吉田茂邸外観、吉田茂写真	2	山口一正
2019-0402	H31.4.16	高田保『河童ひようたん』　他	2	飯島孝志郎
2019-0504	R1.5.16	井上寿一『吉田茂と昭和史』　他	4	曽田成則
2019-0507	R1.5.27	図書（吉田茂関係）	38	和田幸子
2019-0601	R1.6.11	雑誌（吉田茂関係）	3	柴田紳一
2019-0602	R1.6.20	図書『伝馬関係書類』其の一～六	6	加藤哲史
2019-0603	R1.6.20	雑誌『中央公論』2011 年 11 月号　他	6	曽田成則
2019-0702	R1.7.12	田中耕太郎宛吉田茂書簡（軸装）	1	森弘考
2019-0703	R1.7.27	カセットテープ「大磯八景音頭　他」	1	柏木文子
2019-0802	R1.8.28	マッチ箱（城山荘関係）	1	小川芳明
2019-0803	R1.8.28	ライター（島崎藤村愛用品）	1	森岡葉子
2019-0804	R1.8.29	刀剣	2	野地昭史
2019-0805	R1.8.29	大磯海水浴場開設 100 周年記念入場券　他	3	幸野栄子
2019-0902	R1.9.20	吉田茂『日本を決した百年』（中公文庫）　他	6	曽田成則
2019-0903	R1.9.28	古文書（大磯宿関係）	一括	小林良子
2019-1001	R1.10.18	高麗権現由来記　他	2	平田芳晴
2009-1003	R1.10.31	御船祭の写真　他	一括	安永一夫
2019-1201	R1.12.6	吉田茂色紙	1	横地順子
2019-1202	R1.12.10	吉田茂銅像写真	1	中山寛
2020-0101	R2.1.5	新聞記事（吉田茂国葬関連）	5	浅野薫
2020-0103	R2.1.10	安田靫彦関連図書	17	安田由紀夫
2020-0105	R2.1.23	西園寺公望隣荘板額	1	池田正雄
2020-0210	R2.2.27	『父　吉田茂』、新聞切り抜き　他	5	曽田成則
2020-0301	R2.3.10	谷口直枝子宛吉田茂書簡	89	谷口章子
2020-0302	R2.3.24	民具　他	一括	二宮貞道

＜採集資料＞

No.	受入年月日	資料名	数量
2019-0503	R1.5.15	磁器片	2

＜移管資料＞

No.	受入年月日	資料名	数量	受入先
2019-0806	R1.8.29	戸上寛子氏　吉田茂詩・詩額寄贈企画書他	一式	大磯町長

＜購入資料＞

No.	受入年月日	資料名	数量	受入先
2019-0701	R1.7.2	絵本曽我物語	1	福地書店
2019-0801	R1.8.6	絵葉書	8	鵠庵　高橋正幸
2019-0901	R1.9.19	絵葉書	6	鵠庵　高橋正幸
2020-0102	R2.1.9	絵葉書	1	鵠庵　高橋正幸
2020-0209	R2.2.20	吉田茂関連図書	一括	文生書院

＜寄託資料＞

No.	受入年月日	資料名	数量	受入先
2	S63.6.1	山高帽　他	一括	西小磯東区長
5	S63.9.2	四季耕作図　他	11	個人
16	H1.12.9	子ども会旗・七夕資料	一括	西小磯西子ども会
17	H1.8.8	菊池重三郎関係資料	一括	個人
22	H4.4.1	稲荷講資料	一括	個人
23	H4.4.1	雛人形	一括	個人
28	H5.7.22	吉田茂杯　他	5	大磯中学校
30	H6.4.12	掛軸　他	一括	西小磯東区長・西小磯西区長
32	H7.9.12	獅子頭	2(1 対)	裡道区長
35	H13.7.17	屏風　他	一括	南本町区長
37	H15.4.1	木造神像群	12	高来神社
39	H21.4.17	扁額　他	1	国府中学校
40	H21.12.24	伊藤博文書幅	1	個人
41	H22.2.1	大久保家資料	一括	個人
43	H23.6.29	掛軸	1	個人
44	H26.8.12	脇差	1	個人
45	H27.3.6	鈴木芳如関係資料	10	個人
46	H27.4.16	画幅「七福神」　他	2	個人
48	H27.8.4	わきざし　他	8	個人
49	H27.8.4	わきざし	1	個人
50	H28.6.29	袖がらみ　他	2	個人
51	H28.4.5	杉戸絵　他	10	（株）渓泉
52	H28.10.13	国府祭　鷺舞資料	一式	六所神社
53	H29.7.13	城山荘関係資料	57	個人
54	H29.10.26	招仙閣関係資料	26	東光院
55	H29.1.5	日本国憲法草案	2	個人
56	H30.9.9	生沢二宮家資料	一括	個人
57	R2.1.7	安田靫彦宛吉田茂書簡、安田善次郎邸観音堂関連資料	一式	個人

※寄託期間は最長２年とし、２年以降は更新を行う。現在の寄託期間は、令和２年３月 31 日まで。

＜資料の館外貸出＞

資料名	点数	利用目的	年月日	申請者
馬場台遺跡第 63 地点試掘調査資料	一括	発掘調査報告書作成	H31.4.1 ～ R2.3.31	㈱アーク・フィールドワークシステム
吉田茂写真プリント	13	吉田茂写真集印刷製本業務	H31.4.19 ～ R1.5.23	神奈川印刷（株）
加藤文子家旧蔵資料	108	企画展展示	R1.6.18 ～ R1.9.13	春日部市郷土資料館

資料名	点数	利用目的	年月日	申請者
アオバトの卵	1	特別展展示	R1.7.1 ～ R1.11.29	県立生命の星・地球博物館
刀剣「兼定」	1	刀剣研磨作業	R1.7.10 ～ R2.2.28	小野敬博
屏風　他	一式	祭事	R1.7.11 ～ R1.7.17	個人
獅子頭	2	祭事	R1.7.13 ～ R1.7.14	個人
平成 24 年度企画展「東海道大磯宿」使用パネル	一括	展示	R1.8.22 ～ R1.10.27	（公社）大磯町観光協会
東京オリンピック聖火リレー写真	一式	パネル展示	R1.9.10 ～ R1.10.29	スポーツ健康課
堂後下横穴墓群 1 号墓大刀片　他	4	資料保存処理委託	R1.9.24 ～ R2.3.13	（株）東都文化財保存研究所
吉田茂 DVD「大磯を愛した宰相」	2	会議	R1.10.10 ～ R1.11.22	神奈川県
大磯の災害パネル	10	展示	R1.10.24 ～ R1.10.27	個人
掛軸　他	一式	祭事	R2.3.7 ～ R2.3.8	個人

＜資料の特別利用＞

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月
研究・学術	0	2	14	0	1	0
刊行物掲載	6	4	8	2	1	1
放映・動画配信	0	2	0	3	0	0
ウェブ掲載	0	1	0	2	1	0
展示	0	1	1	0	3	1
展示資料の撮影	6	8	5	6	6	4
その他	1	0	0	0	1	1

	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
研究・学術	3	1	1	1	2	0	25
刊行物掲載	3	2	4	2	1	2	36
放映・動画配信	0	0	1	0	2	1	9
ウェブ掲載	0	1	0	1	0	0	6
展示	0	0	0	0	0	0	6
展示資料の撮影	4	2	3	1	2	0	47
その他	1	1	0	1	0	0	6

■ 文献資料収集状況

＜寄贈機関・関係団体リスト一覧＞

《県内》

[大磯町]　エリザベス・サンダース・ホーム、大磯ガイド協会、大磯町政策課、大磯町教育委員会、大磯町教育委員会生涯学習課、大磯町青少年指導員連絡協議会、大磯町立図書館、大磯　馬場地区町内会、詩季の会

[茅ヶ崎市]　茅ヶ崎市教育委員会、茅ヶ崎市文化資料館、四門、茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団

[秦野市]　秦野市教育委員会、野生動物救護の会、夢工房

[藤沢市]　江島神社社務所、湘南考古学同好会、（続）藤沢市史編さん委員会、日本大学生物資源科学部博物館、藤沢市教育委員会、藤沢市藤澤浮世絵館、藤沢市文書館

[平塚市]　常民文化研究会、東海大学文明研究所、平岡学園平岡幼稚園、平塚市教育委員会、平塚市博物館、平塚人物史研究会、横浜詩人会議出版

[伊勢原市]　公益財団法人雨岳文庫
[寒川町]　寒川町教育委員会、寒川町史編集委員会、寒川文書館
[小田原市]　小田原市教育委員会、小田原市郷土文化館、小田原市立図書館、小田原城天守閣、小田原邸園交流館清閑亭、神奈川県植物誌調査会、神奈川県立生命の星･地球博物館、報徳福運社
[箱根町]　箱根町立郷土資料館
[山北町]　山北町地方史研究会
[横浜市]　アーク･フィールドワークシステム、岩崎博物館、馬の博物館、かながわ考古学財団、神奈川県、神奈川県教育委員会、神奈川県博物館協会、神奈川県文化財課、神奈川県民俗芸能保存協会、神奈川県立公文書館、神奈川県立図書館、神奈川県立歴史博物館、神奈川文学振興会、国際協力機構横浜国際センター海外移住資料館、玉川文化財研究所、日本郵船歴史博物館、馬事文化財団、はまぎん産業文化振興財団、浜銀総合研究所、横浜市教育委員会、横浜植物会、横浜都市発展記念館、横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター、横浜市歴史博物館、横浜みなと博物館、横浜ユーラシア文化館
[川崎市]　川崎市教育委員会、川崎市市民ミュージアム、川崎市立日本民家園
[鎌倉市]　鎌倉考古学研究所、鎌倉国宝館、鎌倉市教育委員会、鎌倉文化研究会、斉藤建設、鶴岡八幡宮社務所
[横須賀市]　観音崎自然博物館、横須賀市教育委員会、横須賀市自然・人文博物館
[葉山町]　葉山しおさい博物館
[厚木市]　あつぎ郷土博物館、厚木市教育委員会、睦合文化財株式会社
[相模原市]　イソビク、相模原市、相模原市教育委員会、相模原市立博物館、武相文化財研究所
[海老名市]　海老名市教育委員会
[大和市]　大和市教育委員会
[座間市]　座間市教育委員会
[清川村]　丹沢自然保護協会
[真鶴町]　真鶴町立中川一政美術館
[愛川町]　愛川町郷土資料館
[南足柄市]　南足柄市文化会館

《県外》
[茨城県]　稲敷市歴史民俗資料館、小美玉市教育委員会、かすみがうら市歴史博物館、上貝塚ふるさと歴史の広場、土浦市立博物館
[栃木県]　宇都宮共和大学、小山市立博物館
[埼玉県]　春日部市郷土資料館、国税庁税務大学校税務情報センター租税史料室、埼玉県立川の博物館、ふじみ野市教育委員会、富士見市立難波田城資料館、立正大学博物館
[千葉県]　伊能忠敬記念館、国立歴史民俗博物館、市立市川考古博物館、市立市川歴史博物館、袖ケ浦市郷土博物館、千葉市立加曽利貝塚博物館、千葉県博図公連携事業実行委員会、飛ノ台史跡公園博物館、野田市教育委員会・関宿を語る会、船橋市郷土資料館、松戸市立博物館、松戸市戸定歴史館
[東京都]　板橋区教育委員会、板橋区立郷土資料館、ウェッジ、大田区教育委員会、大田区立郷土博物館、お札と切手の博物館、霞出版社、外務省外交史料館、学習院大学、清瀬市郷土博物館、駒澤大学禅文化歴史博物館、国際文化財、国立科学博物館、品川区立品川歴史館、四門、昭和館、新潮社、ＪＩＣＡ、すばる舎、石文社、大成エンジニアリング、多摩市文化振興財団パルテノン多摩、玉川大学、玉川大学教育博物館、調布市郷土博物館、東京家政学院生活文化博物館、東京家政大学博物館、東京都江戸東京博物館、豊島区立郷土資料館、豊島区立鈴木信太郎記念館、豊島区立雑司が谷旧宣教師館、日本女子大学、日本博物館協会、日本ファイリング株式会社、パスコ、ＢＳ朝日、府中市郷土の森博物館、東日本旅客鉄道株式会社、文化庁、法政大学、町田市教育委員会、町田市立自由民権資料館、港区教育委員会、港区立港郷土資料館、明治大学、靖国神社社務所、雄山閣、立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクトニュースレター編集委員会、ワニブックス
[静岡県]　伊豆の国市教育委員会、静岡県立美術館、沼津市歴史民俗資料館、三島市教育委員会、三島市郷土資料館、三島地域資料研究会

[愛知県]　安城市歴史博物館、一宮市尾西歴史民俗資料館、ＮＴＴタウンページ株式会社中部営業本部、豊橋市二川宿本陣資料館、豊橋市美術博物館、豊橋市美術博物館友の会
[山梨県]　環境省自然環境局生物多様性センター、南アルプス市教育委員会
[群馬県]　渋川市教育委員会
[長野県]　茅野市教育委員会、茅野市神長官守矢史料館、茅野市美術館、茅野市文化財課文化財係、茅野市八ヶ岳総合博物館、茅野市八ヶ嶽岳麓文芸館
[新潟県]　奥山荘郷土研究会、十日町市博物館
[岐阜県]　藤村記念館
[三重県]　亀山市歴史博物館、鈴鹿市考古博物館
[和歌山県]　和歌山県立自然博物館、和歌山県立博物館、和歌山県立文書館
[滋賀県]　草津宿街道交流館
[大阪府]　大阪市立自然史博物館、富田林市教育委員会、吹田市立博物館
[兵庫県]　人と防災未来センター
[岡山県]　岡山民俗学会
[山口県]　伊藤公資料館
[高知県]　高知県牧野記念財団
[岩手県]　奥州市牛の博物館
[青森県]　青森県立郷土館
[北海道]　帯広百年記念館、沙流川歴史館、美幌博物館

旧吉田茂邸（郷土資料館別館）学芸活動

■ ミニ企画展

ミニパネル展①「吉田茂写真展－当館所蔵未公開写真を中心として－」

期　　間／平成 31 年 4 月 27 日 (土) ～令和元年 6 月 30 日 (日)
開場日数／ 56 日間
会　　場／旧吉田茂邸　展示・休憩室
観覧者数／ 12,693 人
趣　　旨／旧吉田茂邸の公開をきっかけとして寄贈を受けた吉田茂に関する資料の内、未公開の写真資料を展示する。
内　　容／吉田家寄贈写真を中心に、大磯の邸宅における吉田の暮らしぶりや、私人としての吉田の表情にせまる。
（担　当）久保庭

ミニパネル展②「鈴木貫太郎と吉田茂―終戦をみつめた二人の首相―」

期　　間／令和元年 7 月 3 日（水）～ 10 月 31 日（木）
開場日数／ 99 日間
会　　場／旧吉田茂邸　展示・休憩室
観覧者数／ 10,999 人
趣　　旨／鈴木貫太郎は海軍軍人として海軍の要職を歴任し、終戦時の内閣総理大臣を務めた。吉田茂とは、鈴木が学習院軍事教練担当教師として赴任していた際に知り合い、以後戦後に至るまで交流が続いた。鈴木貫太郎は終戦時の首相として、吉田茂は戦後復興を担った首相として、共に日本が厳しい状態に置かれていた時代に、国政を担った。こうした鈴木と吉田の関係や、エピソードを取り上げる。
内　　容／
（1）鈴木貫太郎と吉田茂の出会い
吉田茂が学習院大学時代に軍事教練担当教師であった鈴木貫太郎と出会ったエピソードや、吉田の岳父・牧野伸顕と鈴木貫太郎との繋がりについて紹介した。
（2）終戦と鈴木貫太郎
戦時中～終戦にかけて、吉田茂と鈴木貫太郎が戦争終結に向けて行った活動を概観した。
（3）戦後の鈴木・吉田
吉田茂が外務大臣就任時に鈴木を訪問し「負けっぷりをよくしなければならない」と言われたエピソー

ドを紹介。また、鈴木は吉田に請われ、枢密院議長に就任し、日本国憲法の制定などにも携わった。
(4) 鈴木と吉田の交流
当館所蔵資料及び鈴木貫太郎記念館所蔵資料（複製）の中から、鈴木貫太郎及び吉田茂の書簡を展示した。
（担　当）久保庭

ミニパネル展③「吉田茂　暮らし展」
期　　間／令和元年 11 月 2 日（土）〜令和 2 年 3 月 31 日（火）
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和 2 年 3 月 7 日から臨時休館
開場日数／ 98 日間
会　　場／旧吉田茂邸　展示・休憩室
観覧者数／ 11,851 人
趣　　旨／「白足袋宰相」「和製チャーチル」と言われた吉田茂の独特の暮らしぶりに焦点を当て、衣・食・住それぞれの視点から展示を行う。
内　　容／
(1) 衣
吉田茂は「白足袋宰相」や「和製チャーチル」と呼ばれ、吉田独特の装いをしていた。公の場では洋装を着こなし、家では常に和服で暮らしていた。写真や関係者の証言などを参考にし、服のメーカーや素材、吉田が贔屓にしていた店の紹介をし、弦なし眼鏡やステッキ、帽子などにも言及した。
(2) 食
吉田茂は食にもこだわりがあった。吉田茂の普段の食生活や、吉田が贔屓にしていた料理人・店舗などを紹介した。
(3) 住
吉田茂が生きていた当時の邸宅内写真から、吉田が愛用していた家具・調度品を紹介した。
（担　当）久保庭

■ 展示解説・講演会

展示解説
日　　時／令和元年 9 月 7 日（土）・21 日（土）、10 月 12 日（土）・26 日（土）、11 月 9 日（土）・23 日（土）、12 月 7 日（土）・21 日（土）、令和 2 年 1 月 11 日（土）・25 日（土）、2 月 8 日（土）・22 日（土）
14 時〜 14 時 30 分頃
※ 10 月 12 日（土）は台風 19 号による臨時休館のため中止
場　　所／旧吉田茂邸　研修室
参加人数／延 53 人
内　　容／担当学芸員が邸内・ミニパネル展の内容を 30 分程度で解説した。
（担　当）久保庭・飯野

国登録有形文化財登録記念七賢堂特別開扉講演会
「「政界の奥座敷」大磯の別荘群からみた近代史―伊藤博文から吉田茂まで―」
期　　日／令和元年 9 月 23 日 (月)
場　　所／県立大磯城山公園　旧吉田茂邸地区　管理休憩棟
講　　師／奈良岡聰智　氏（京都大学公共政策大学院教授）
参加人数／ 53 人
趣　　旨／県立大磯城山公園内の兜門・七賢堂・サンルームが平成 31 年に国登録有形文化財（建造物）に登録されたことを記念し、県立大磯城山公園が主催する七賢堂特別開扉にあわせて、七賢堂に関する講演会を開催する。講演会を通じて、七賢堂に関係の深い人物への理解を深め、かつ吉田邸と七賢堂の関係についても広く知ってもらうための機会とする。

内　　容／県立大磯城山公園旧吉田茂邸地区にある七賢堂は、もともと伊藤博文が大磯の邸宅「滄浪閣」に建立した建造物であり、のちに吉田茂が自邸に移築した。伊藤博文と吉田茂はいずれも大磯と関係の深い人物であり、講演では七賢堂を切り口として伊藤・吉田の二人を取り上げ、近代に別荘地として発展してきた大磯の特徴について理解を深めた。とりわけ、大磯が日本の保守政治の大きな流

れが俯瞰できる場所であり、七賢堂はその象徴的な存在であるということについて、お話しいただいた。
（担　当）久保庭

講演会「鈴木貫太郎と吉田茂─二人の交流と業績─」

期　　日／令和元年 10 月 6 日（日）
場　　所／旧吉田茂邸　研修室
講　　師／笹川知樹 氏（千葉県野田市鈴木貫太郎記念館学芸員）
参加人数／ 24 人
内　　容／鈴木貫太郎の生涯とその業績や鈴木と吉田との繋がりなどをお話しいただいた。また、鈴木貫太郎記念館で所蔵している、鈴木貫太郎宛吉田茂書簡、鈴木貫太郎の回想を紹介したマッカーサーと吉田茂の往復書簡、鈴木貫太郎日記についてもお話しいただいた。
（担　当）久保庭

■ 決断に特化した旧吉田茂邸独自イベント

旧吉田茂邸は、博物館として様々な講座や研修などを行うための研修室が設けられ、平成 29 年 4 月の開館以来、吉田茂元首相や近代史などを学ぶための講座などを開催している。また、日本の戦後復興は東洋の奇跡と呼ばれ、吉田茂元首相は中心人物の一人であり、旧吉田茂邸においても戦後復興に向け様々な決断が行われた場所であることから、「決断の聖地」をキーワードにした就活支援やビジネスパーソン向け研修講座を開催している。吉田茂元首相を学びながら、「決断の聖地」をキーワードにした企業向け研修などへの取組を進め、施設利用の拡充を図る。

究め人（きわびと）講演会〔第 2 弾〕「星を究（きわ）める」
期　　日／令和元年 6 月 16 日（日）
場　　所／旧吉田茂邸　研修室
講　　師／鳫宏道　氏（平塚市博物館前館長）
参加人数／ 21 人
内　　容／平塚市博物館の天文学担当の学芸員をされてきた鳫先生が天文に興味を持たれたきっかけや、調査・研究活動の業績について、身近な星、月や太陽ついてお話しいただき、最新天文学の成果を盛り込んだ迫力ある宇宙の映像を見せていただいた。
（担　当）北水・齋藤

究め人（きわびと）講演会〔第 3 弾〕「ウミガメを究（きわ）める」
期　　日／令和元年 7 月 28 日（日）
場　　所／旧吉田茂邸　研修室
講　　師／菅沼弘行 氏（認定 NPO 法人エバーラスティング・ネイチャー常任理事・保全戦略グループ長）
参加人数／ 21 人
内　　容／ウミガメの不思議な生態についてのお話ののち、国内外でのウミガメ減少状況の調査結果をもとに、絶滅させないために人間はどんなことをすればよいのか、またはしてはいけないのかなど、保護活動についてお話しいただいた。
（担　当）北水・齋藤

産業能率大学との連携事業「旧吉田茂邸写生会と絵画コンテスト」
「大磯町と産業能率大学の包括的な提携事業に関する協定」に基づく事業として実施した。
小中学生を対象とした旧吉田茂邸写生会と絵画コンテストを通して、小中学生が吉田茂や近現代史に関心をもってもらう機会を創出し、実施にあたっては参加する小中学生を、大学生がサポートすることで好奇心を刺激し、より楽しく学ぶことができるように仕向けた。また、写生会の参加者は、絵画コンテストに応募することを可能とし、創作意欲が高まることを期待した。
〔旧吉田茂邸　写生会〕
期　　日／令和元年 8 月 9 日（金）
場　　所／旧吉田茂邸　研修室

対　　象／小学４年生～中学３年生
参 加 費／無料
参加人数／ 12 人（中学生１人、小学生 11 人）
共　　催／産業能率大学
協　　力／三浦研究室（産業能率大学情報マネジメント学部）
内　　容／大学生 10 名によるオリエンテーション（吉田茂の解説、邸内の案内）ののち、場所決め、テーマ、描き方、健康管理のサポートをしていただき、制作を開始した。当日の制作は下書きのみとし、色付け（水彩、色鉛筆など）は自宅での宿題とした。

〔絵画コンテスト〕

期　　日／審査：令和元年 10 月 18 日（金）　表彰：令和元年 11 月 23 日（土）
対　　象／写生会参加者
審 査 員／産業能率大学：教員２名、大磯町：町長、副町長、教育長、教育委員１名、町立学校長会１名
内　　容／小学生及び中学生から１作品ずつ優秀賞を選び、優秀賞を受賞した作品を、旧吉田茂邸で配布するクリアファイルの図柄として採用した。また、おおいそ文化祭のオープニングイベントとして実施した表彰式において、優秀賞受賞者へ賞状を授与した。応募者全員に対して、本人の作品を印刷したトートバッグを贈呈し、作品を令和元年 11 月 29 日（金）～ 12 月１日（日）に実施したおおいそ美術展において展示した。
※令和元年 10 月 12 日（土）に絵画コンテスト応募者を対象として、写生会で描いた絵をデジタル画像にして動作させるプログラミング体験のワークショップを実施する予定であったが、台風 19 号による臨時休館のため中止した。
（担　当）佐川・齋藤

■ 博物館資料の整備

＜収蔵資料整備＞

映像フィルムデジタル化委託

業務内容／財団法人吉田茂国際基金から寄贈された音声 6mm オープンリール９点及びカセットテープ 10 点の保存処理及びデジタルデータ化を行った。
契約期間／令和元年９月 18 日 ～ 12 月 20 日
請 負 者／（株）東京光音

刀剣研磨処理委託

業務内容／旧吉田家旧蔵資料のうち、刀剣「兼定」について研磨処理を行った。
契約期間／令和元年６月 14 日 ～令和２年２月 28 日
請 負 者／小野敬博

■ 調度品等の整備

＜調度品製作委託＞

旧吉田茂邸調度品製作委託

業務内容／焼失前の旧吉田茂邸に設置されていた調度品のうち銀の間執務机及び椅子の製作を行った。
契約期間／令和元年８月２日 ～令和２年３月 13 日
請 負 者／（有）東京インテリアクラフト

■ 刊行物

＜図録・冊子＞

・『吉田茂　写真集―大磯で暮らした日々―』　Ａ４判 20 頁　1,000 部（令和元年５月刊）

＜チラシ・パンフレット＞

・講演会『「政界の奥座敷」大磯の別荘群からみた近代史』チラシ　Ａ４判両面 2,000 部（令和元年８月刊）
・展示解説シート『大磯と吉田茂』　Ａ４判両面 10,000 部（令和２年１月刊）
・展示解説シート『政治家としての吉田茂』　Ａ４判両面 10,000 部（令和２年１月刊）
・展示解説シート『旧吉田茂邸再建事業』　Ａ４判両面 10,000 部（令和２年１月刊）
・旧吉田茂邸案内チラシ印刷　Ａ４判片面 10,000 部（令和２年１月刊）
・旧吉田茂邸パンフレット（英語版）　Ａ４判両面 2,000 部（令和２年２月刊）

■ 視察・見学対応

＜視察・見学の月別件数＞　　単位：団体

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
視察	4	5	2	3	0	1	2	3	3	2	1	0	26
見学	1	1	2	1	1	0	0	0	0	0	1	0	7

※令和２年３月７日から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時休館

＜視察対応＞　館職員が対応した団体のみ記載

・国土交通省公園緑地・景観課及び神奈川県都市整備課／５月 14 日／４人（國見）
・国土交通省及び北九州市／ 10 月 23 日／６人（富田）
・神奈川県議会経済・産業振興特別委員会／ 10 月 30 日／９人（國見）

＜見学対応＞　館職員が対応した団体のみ記載

・大磯町体育協会／６月８日／ 30 人（富田）
・平塚市立崇善公民館／６月 21 日／ 20 人（久保庭）
・小出地区と小和田逐のまちぢから協議会／７月５日／ 10 人（飯野）
・NHK 文化センター光が丘教室／８月９日／ 25 人（久保庭）
・HaNaNiOi 移住体験日帰りバスツアー／２月 16 日／ 38 人（久保庭）

■ 取材対応

＜テレビ＞

・NHK『NHK スペシャル（令和元年８月 17 日放送）』「昭和天皇は何を語ったのか」（久保庭）
・テレビ東京『池上彰の歴代総理からわかるオモシロ昭和史（令和２年２月 23 日放送）』（久保庭）

＜ウェブサイト＞

・神奈川県運営サイト『マクガル・ドット・ネット』「著名人が愛した神奈川」令和元年 12 月 14 日対応（久保庭）

学芸員の調査、研究、普及活動

＜通年の活動＞

・博物館資料調査／年間／大磯町内外（学芸員全員）
・駒澤大学博物館学講座講義／年間／駒澤大学（國見）
・神奈川県博物館協会理事／年間（國見）
・第 68 回全国博物館大会実行委員会委員／令和２年１月４日～（國見）
・アジア太平洋戦争期の相武地域史研究会／年間／東海大学（富田・久保庭）
・全国歴史資料保存利用機関連絡協議会会長事務局事務局員／年間（久保庭）

＜庁内事業への協力＞

・新採用職員研修会講義／４月 12 日／大磯町保健センター（國見）

＜学校教育との連携＞

郷土資料館の見学・学習指導

講義名	月日	場所	担当
国府中学校１年生校外活動	4 月 18 日	郷土資料館・旧吉田茂邸	―
国府中学校生沢分校	4 月 19 日	郷土資料館	久保庭
大磯小学校３年生総合的な学習 「いっぱい知りたい大磯町」	5 月 31 日	郷土資料館・旧吉田茂邸	富田・久保庭
国府小学校生沢分校６年生	10 月 4 日	郷土資料館	―
梅の木幼稚園（二宮町）	10 月 24 日	郷土資料館	―
国府中学校１年生総合的な学習「大磯調べ」	10 月 24 日	郷土資料館	富田・久保庭・高山
国府小学校４年生社会科 「昔から今へと続くまちづくり」	10 月 31 日	郷土資料館	富田・今井

講義名	月日	場所	担当
茅ケ崎市立小出小学校	11 月 21 日	郷土資料館	—
県立平塚養護学校	12 月 3 日	郷土資料館	—
こいそ幼稚園	1 月 14 日・21 日	郷土資料館	—
星槎国際高校湘南	2 月 19 日	郷土資料館	—
大磯中学校	2 月 20 日	郷土資料館・旧吉田茂邸	—
たかとり幼稚園	3 月 3 日	郷土資料館	—

学校等への講師派遣

講義名	月日	場所	担当
日本女子大学 4 年生「博物館実習」	5 月 9 日	日本女子大学目白キャンパス	國見
大磯幼稚園「磯あそび」	6 月 18 日	照ヶ崎海岸	村田

教員を対象とした講義

講義名	月日	場所	担当
大磯中学校教職員社会体験研修	8 月 6 日・8 日・9 日	郷土資料館	富田・久保庭
令和元年度大磯町教育研究所主催「総合学習に生かせる大磯の自然散策」	8 月 20 日	郷土資料館・町内	高山・村田

＜各種団体との連携＞

各種団体への講師派遣

講義名	月日	場所	担当
大磯町災害救援ボランティアの会講演会 「関東大震災と大磯」	4 月 17 日	町立福祉センター・さざれ石	富田
「地域の歴史を掘り起こす」講演会 「別荘地としての大磯」	6 月 1 日	東海大学湘南校舎	富田
全史料協関東部会第 301 回定例研究会 「全史料協関東部会のこれまでとこれから」	8 月 8 日	渋沢史料館	富田
NPO 法人大磯ガイド協会歴史教育研修会 「大磯町の横穴墓群―その構造と副葬品―」	10 月 30 日	郷土資料館	鈴木一
専修大学人文科学研究所・共同研究 「鉄道文化資源の保存と継承」研究会 「鉄道が遺した器～汽車土瓶の発生と展開～」	1 月 11 日	専修大学サテライトキャンパス	國見
「玉縄歴史の会」公開講座 「高麗寺と高麗寺村の歴史」	3 月 1 日	玉縄学習センター分室	富田

＜学会・研究会との連携＞

研修会・会議出席等

名称	月日	場所	担当
令和元年度神奈川県博物館協会第 1 回役員会・総会・第 1 回研修会	5 月 10 日	県立歴史博物館	國見
日本考古学協会第 85 回（2019 年度）総会	5 月 18 日	駒澤大学駒沢キャンパス	國見
令和元年度全史料協総会及び記念講演会	6 月 5 日	学習院大学	久保庭
第 26 回全国博物館館長会議	7 月 3 日	文部科学省	國見
第 1 回アジア太平洋戦争期の相武地域史研究会	6 月 20 日	横浜開港資料館	久保庭
第 2 回アジア太平洋戦争期の相武地域史研究会	8 月 29 日	横浜開港資料館	久保庭
全国歴史資料保存利用期間連絡協議会全国大会	11 月 13 日～15 日	安曇野市豊科公民館	久保庭
第 3 回アジア太平洋戦争期の相武地域史研究会	11 月 28 日	横浜開港資料館	久保庭
相武地域史研究会資料調査	12 月 11 日	伊勢原市役所	久保庭

名称	月日	場所	担当
神奈川県博物館協会による川崎市市民ミュージアム博物館資料レスキュー活動	12月12・19日、1月30日、2月13・27日	川崎市市民ミュージアム	富田・久保庭
全史料協保有文書調査	1月28日	高崎倉庫株式会社	久保庭

＜執筆＞

富田　三紗子

2019. 10.『鳴立庵』大磯町郷土資料館
2020. 1. 資料館資料18『大磯町助役日誌　大正四年一〇月～大正五年一二月』大磯町郷土資料館
2020. 3.「『収蔵資料データベース』について」『Report －大磯町郷土資料館だより』40　大磯町郷土資料館
2020. 3.「清水善仁報告『全史料協関東部会定例研究会300回のあゆみ』に対するコメント」『アーキビスト　全史料協関東部会会報』93　全史料協関東部会

久保庭　萌

2019. 5.『吉田茂　写真集―大磯で暮らした日々―』大磯町郷土資料館
2019. 9.「全史料協沖縄大会参加報告記」『アーキビスト　全史料協関東部会会報』92　全史料協関東部会
2020. 3.「国登録有形文化財登録記念七賢堂特別開扉講演会講演抄録」『Report －大磯町郷土資料館だより』40　大磯町郷土資料館

飯野　友紀

2020. 3.「国登録有形文化財登録記念七賢堂特別開扉講演会講演抄録」『Report －大磯町郷土資料館だより』40　大磯町郷土資料館

中原　園子

2020. 3.「国登録有形文化財登録記念七賢堂特別開扉講演会講演抄録」『Report －大磯町郷土資料館だより』40　大磯町郷土資料館

温水　基輝

2020. 3.「国登録有形文化財登録記念七賢堂特別開扉講演会講演抄録」『Report －大磯町郷土資料館だより』40　大磯町郷土資料館

研　究　報　告

菊池重三郎と馬籠

伊藤　匠
（当館学芸員（臨時職員））

1. はじめに

昭和18年（1943年）8月22日、明治・大正・昭和にかけて文壇で活躍し、『夜明け前』など名著を手掛けた島崎藤村が、大磯町台町にある邸宅にて亡くなった。

藤村邸の近くである大磯町山王町に住んでいた菊池重三郎は、島崎家に頼まれ藤村の葬式の会計係を務めることになった。加えて、地元大磯に詳しいことから、会計以外の事務手続きから来客の対応まで不眠不休で取り組んだ。

24日午前9時出棺。大磯町の地福寺にて、藤村の遺言通り土葬による葬式が営まれた。その様子は「ひつそりと、ものものしさから遠かった」という[(1)]。

同日午後3時、大磯での葬式が終わり、菊池は藤村邸に戻って一息ついた。そして、八畳の茶の間にひっくり返り、「…馬籠に行って見ようかな。」とフッと浮かんだのであった[(2)]。

菊池重三郎（明治34年〜昭和57年）は宮崎県出身の作家、翻訳家である。昭和5年より新潮社などに勤務するかたわら文筆活動を行い、昭和6年には『欧羅巴物語』、昭和15年には訳書『バンビの歌』などを刊行する。昭和10年に大磯町へ移住する。

昭和16年1月16日、藤村が大磯の左義長の祭りの見物を希望したため、菊池がその宿を斡旋した。それをきっかけとして、藤村は大磯への移住を考えるようになった。

ある日、菊池は藤村から大磯の空き家探しを頼まれた。そこで、大磯在住で藤村の古い馴染みである天明愛吉と共に空き別荘を見繕い、2月中には入居できるよう準備を進めた。

入居後、藤村はしばらく東京と大磯を往復していたが、やがて大磯に落ち着いた。そして、『東方の門』第三章の執筆途中、藤村は永い「休息」に入るのであった[(3)]。

藤村の葬式は都合三度行われた。一度目は大磯地福寺での葬式である。二度目は東京青山斎場での告別式である。

三度目が藤村の故郷である馬籠の永昌寺にて、昭和18年10月9日に行われた遺髪埋葬式である。この遺髪埋葬式に参加するべく、菊池は初めて馬籠を訪れたのであった。

以上の経緯が、菊池と馬籠の関係のはじまりである。その後、戦時疎開を経て、菊池は馬籠の人々と交友を深め、ふるさと友の会（後の藤村記念郷）の発足や藤村記念堂（後の藤村記念館）の建設にも携わっていくことになる。

このように、菊池は馬籠における島崎藤村記念事業の中心的な役割を果たした人物であり、同時に戦後間もない頃の馬籠の町おこしに寄与した人物であった。

また、作家として、『馬籠』（東京出版株式会社、1946年）と『木曽馬篭』（小山書店新社、1958年）を刊行し、馬籠の名を日本全国に知らしめた点でも評価されるべき人物である。

『馬籠』は島崎藤村の葬式から、戦時疎開中の馬籠での生活を描いた著作である。『木曽馬篭』は、『馬籠』と同様に、島崎藤村の葬式から始まるが、代わって、藤村記念事業への取り組みを中心に、藤村記念堂の建設までを取り上げた著作である。

さて、大磯町郷土資料館には、寄託資料として菊池重三郎関係資料が1,510点現存している。その中には、馬籠での藤村記念事業に関係する資料もあれば、『馬籠』や『木曽馬篭』の執筆に関係する資料もある。

そこで、本稿では、大磯町郷土資料館の寄託資料である菊池重三郎関係資料の紹介を行いつつ、『馬籠』や『木曽馬篭』の記述を参照して、菊池と馬籠の関係を考察する。

2. 馬籠での生活

馬籠は岐阜県中津川市に所在する旧中山道の宿場町である。中山道六十九次の内、1番の板橋宿より数えて馬籠宿は43番目に当たる。なお、42番目が妻籠宿、44番目が落合宿である。

明治初期より長野県西筑摩郡神坂村に属し、昭和33年からは同郡山口村に属する。昭和43年に長野県木曽郡山口村と改称、平成17年（2005年）に山口村は越県合併により岐阜県中津川市に編入されることになる。

馬籠を通る旧中山道は北東から南西へと伸びている。途中、枡形によって道が屈曲しているため直線ではないものの、坂下の馬籠バス停から坂上の陣場（見晴台）までの直線距離は大体600m程度となっている[(4)]。

藤村とその家族が眠る永昌寺は、馬籠集落の北側少しはずれにある。藤村記念館は、旧中山道沿いに軒を連ねる馬籠集落の中腹程度、島崎家が住んでいた旧本陣屋敷の跡地にある。

島崎家は本陣・庄屋・問屋の三役を兼ねていた旧家であった。島崎春樹（藤村）は島崎家17代当主正樹の末子として明治5年（1872年）に誕生した。藤村は旧本陣屋敷にて育ち、明治14年、勉学のため東京へ移住する。

明治28年、馬籠に大火が発生し、旧本陣屋敷は隠居所を残して焼失してしまう。この隠居所が、藤

村が幼年の頃に過ごした勉強部屋であり、菊池重三郎が昭和20年4月1日より戦時疎開として、家族とともに寄寓した場所である。

隠居所の間取りは三畳と八畳の中二階である。西向きに明るく、障子を開ければ本陣跡（藤村記念館）を見下ろす位置にあり、恵那山、梵天山、永昌寺の森、遠くは美濃の山々を展望できる (5)。

当時、旧本陣屋敷の跡地は大黒屋（藤村記念館の右隣り）の畑地となっていた。菊池が疎開した時には野菜の他、柿、なつめ、梅、海棠、柘榴などが植えられていた。

旧本陣屋敷跡の左隣りは藤村の長男楠雄が居住していた緑屋（現在は四方木屋）である。藤村の遺髪埋葬式の日、菊池は緑屋の写真を用いた絵葉書を娘に送っている (6)。

『馬籠』や『木曽馬篭』には、隠居所を舞台とする数々のエピソードが掲載されている。菊池が、藤村の『初恋』の相手であるおゆふさま (妻籠宿の奥屋林六郎の母、出身が大黒屋) と会った話、大黒屋の土蔵と大脇文平（大黒屋の当主）の話、鈴木儀助に酒を求められる話等である。

また、隠居所には大きな井戸が設置されている。菊池は隠居所に寄寓している間、炊事洗面のために井戸を利用した。この井戸共々、隠居所は現在も残っており観覧することができる。

3. 『馬籠』について

藤村の遺髪埋葬式が行われた昭和18年10月9日より、『馬籠』が刊行される昭和21年まで、菊池は合計18回大磯と馬籠を往復している。さらに、馬籠滞在中に岐阜県や愛知県に旅行した回数も含めれば、往復回数は二十数回にも及ぶとしている (7)。

当時、馬籠にはバスなどが通っておらず、馬籠に行くためには落合川駅から歩くか、三留野駅（現在の南木曽駅）から妻籠宿を経由して歩いて行く他無かった。

昭和20年4月1日からは太平洋戦争の疎開のため、家族とともに馬籠にほとんど移住する形になる。この疎開は終戦後もしばらく続き、家族が大磯に帰ってくるのは昭和22年になる。

『馬籠』は、菊池の第15回目の馬籠行きまでの出来事に関する新聞や雑誌に掲載した著述を集成したものである。そのため、藤村記念館に関する記述は掲載されていない。

『馬籠』執筆の経過については、菊池重三郎関係資料からある程度考察することができる。

まず、『馬籠』に4番目の話として収録されている「夕ばえ」については、昭和20年4月中旬頃に執筆を開始したことが明らかである (8)。菊池は「夕ばえ」を馬籠に関する著作の2番目に執筆した作品としている。執筆の時期と『馬籠』の掲載順は必ずしも一致しないことが分かる。なお、「夕ばえ」は5月上旬に完成した (9)。

また、『馬籠』の8番目の話である「獵人日記」については、東京出版株式会社の編集長野田宇太郎からの書簡によって、昭和21年2月頃に書かれた話であることが分かる (10)。

書簡にて、野田は「獵人日記」が届き「さっそく通読、一人にこにこと笑ってしまっ」たことを菊池に伝えている。「獵人日記」は東京出版社の雑誌『芸林間歩』に掲載された。

野田は菊池の良き理解者であった。菊池が馬籠に関する執筆活動に賛同し、「『馬篭』の続行鶴首いたしてゐます。まだかまだかと。」「『馬篭』も早く出版したいものです。」などと期待を込めて書簡を送っている (11)。

『馬籠』は昭和21年11月15日に刊行されるのであるが、その前日の11月14に定価や発行部数について書簡が届いている (12)。書簡によれば、『馬籠』の定価は27円で発行部数は7000部となっている。その内、50部は菊池に発送し、200部は馬籠の末木利一に発送している (13)。

末木利一は、馬籠の坂上にある上扇屋 (陣場扇屋) の主人である。菊池が初めて馬籠を訪れた際、末木に落合川駅から案内され上扇屋に宿泊している。

『馬籠』の装幀は画家の鈴木保徳が作成した。鈴木は『馬籠』だけでなく、菊池の他の著作、昭和5年の『欧羅巴物語』などの装幀も手掛けた人物である。昭和21年8月17日付のはがきより、菊池が指定した色を用いて鈴木が装幀を作成したことが分かる (14)。

この『馬籠』の感想について、菊池の友人知人からいくつか手紙が届いている。画家の曽宮一念は『馬籠』を読み、かつて訪れた「あの辺の景色をはっきりと浮んで来ました。」と感想を述べている (15)。

このように『馬籠』を読み、お礼の手紙を送った人物は曽宮だけではなく、先述の鈴木保徳や作家の中勘助などもそうである。

こうして菊池は藤村の縁を通じて、馬籠を幾度となく訪れ、その体験を文字に起こしていくことで、徐々に馬籠との関係を深めていった。

4. 藤村記念館について

藤村記念館の建設の過程については、菊池の『木曽馬篭』の他、藤村記念郷編『藤村記念館五十年誌』（1997年）に詳しい。

また、『木曽馬篭』とは別に、菊池は『藤村記念堂由来記抄』（ふるさと友の会、発行年不詳）を執筆し、馬籠への道案内もしている。

藤村記念館は、設立当初藤村記念堂という名称で

あった。その後、施設の拡張などを経て、昭和27年に藤村記念館と名称を改める。以下、藤村記念館に名称を統一する。

菊池重三郎関係資料中、藤村記念館の建設に関してまず注目すべき資料は、建築家谷口吉郎が作成した藤村記念館の各種設計図であろう。

谷口は藤村記念館の設計図を作成するため、昭和22年3月に馬籠を訪れて、旧本陣跡を実測した。谷口らが作成した設計図は「敷地配置図」「表門及塀詳細図」「記念館平面図及立面図」「正面土塀・室内展開図及屋根伏図」「記念館詳細図」の5枚である[16]。

菊池と谷口は、野田宇太郎を介して既に面識があった。馬籠にて藤村記念事業の機運が高まると、昭和21年9月に、菊池はその事業内容について谷口と相談している。谷口は菊池から事業内容を聞いて「喜んでお供申したいと存じます。」と快諾している[17]。

また、藤村記念館の建設事業は、地元の有志の協力があってこその事業であった。

『木曽馬篭』によれば、昭和21年の秋の暮、大磯へと引き上げる数日前、菊池は鈴木儀助と原穣に呼ばれて「何か一つ善いことを、やろまいか」と持ち掛けられたのが、始まりであったとしている。馬籠には、かねてより島崎藤村を記念する事業をやろうという動きがあった。ただ、意見紛々して中心になる人物もおらず、また、資金も集まらずにうやむやになっていたのである。

そこで、鈴木たちは疎開中の菊池に意見を求めたが、菊池は記念事業を行うことは容易でないと説いた。敗戦後で物資も乏しく、また、記念事業として何かを建てるにしても人数を集められないのではないかという危惧からである。

すると、鈴木は「俺たち仲間が、ひとたび起ち上がったら、何でも、やれんということはないぞなし！」と「大言壮語ともいうべき言葉を」発したのである[18]。

菊池はこの言葉に突き動かされ、大磯に帰宅して早々、年末に記念事業の具体的な設計について相談するべく馬籠に舞い戻ったのである。

ちなみに、当事者である鈴木儀助は後年この時のことを回顧して次のように述べている[19]。

それは、菊池と鈴木と原の3人で囲炉裏を囲って酒を飲んでいた時のことである。菊池が突然体を起こして、「こうやって毎日毎日、酒飲んでぐだぐだしていてもダチカン。一つどうだい、何か後の世の記念になるような事をやろまいか」と言い放った。

鈴木と原は菊池が言わんとしていることが呑み込めなかったが、酒の勢いも手伝って口々に「やろまいか」と賛同したという次第であった。

鈴木たちが持ち掛けたのか、それとも菊池が持ち掛けたのか、とにかく、敗戦後の暗い社会情勢の中で「何か一つ善いことを､やろまいか」を合言葉に、記念事業に乗り出すのである。

そして、馬籠の有志が集まり、藤村記念事業の達成を期してふるさと友の会が発足することになる。昭和22年2月17日、島崎藤村の誕生日と結び付けて、旧本陣屋敷跡でふるさと友の会の発会式が執り行われた。

菊池重三郎関係資料中のふるさと友の会の説明書きには、藤村記念事業として、「一、馬籠本陣跡の浄化、二、野外劇場の設立、三、記念講堂、四、記念宿舎」を掲げている[20]。また、この説明書きには、発起人である菊池と谷口の他、地元の有志97名、賛助員21名、特別賛助員11名が記されている。さらに、追加の賛助員がメモされており、ふるさと友の会がいかに多大な援助を受けて立ち上がったのかを物語っている。

特別賛助員には、有島生馬や佐藤春夫など文芸界の著名人や、後に島崎藤村像を作成する石井鶴三、同じく藤村の肖像画を描いた高畠達四郎が名を連ねている。また、新潮社や東京出版株式会社といった企業も見受けられる。

昭和22年11月15日、藤村記念館の落成式が行われた。『木曽馬篭』には、落成式当日の様子について、菊池自身ではなく、参加者の有島生馬の文を引用している。なお、菊池はこの時の有島の文章を筆写しており、その原稿が現存している[21]。

ふるさと友の会は昭和25年に財団法人藤村記念郷と名称及び体制を変えている。因みに、昭和26年には菊池宛に藤村記念郷の顧問就任依頼が届いている[22]。

5. 『木曽馬篭』について

『木曽馬篭』は藤村の葬儀より、ふるさと友の会の発足、藤村記念館の建設、後日談をまとめた著作である。なお、『馬籠』とは異なり、菊池の直筆原稿が菊池重三郎関係資料として現存している[23]。

『木曽馬篭』が出版されたのは、落成式から11年後の昭和33年である。それだけ期間が開いた理由について、戦時中に馬籠の隠居所で生まれた子供の看病に奔走したため、「他を顧みる余力がなかったから」と「あとがき」で説明している[24]。

なお、菊池の日記から『木曽馬篭』の執筆経緯をうかがい知ることが出来る[25]。

昭和33年9月末より、『木曽馬篭』執筆に関する話が出始める。10月に入ると馬籠の現況調査や『馬籠』を読み返すなどしている。

11月7日、小山書店の小山久二郎と『木曽馬篭』について話がついた。日記によれば､小山久二郎は､

藤村から三男蓊助を託された人物とのことで、『木曽馬篭』の執筆についても「話のわかりも早」かったという。

それから、『木曽馬篭』執筆のため、谷口吉郎から写真を提供してもらうなど材料を集めつつ、小山書店と打ち合わせを重ね、12月6日に『木曽馬篭』は完成した。

『木曽馬篭』の序文は、獅子文六こと岩田豊雄が執筆した。序文の執筆時期は昭和41年なので、『木曽馬篭』の初版には掲載されていない。菊池重三郎関係資料に獅子文六の直筆原稿と菊池の筆写原稿が現存している(26)。

上梓した『木曽馬篭』は藤村記念館の関係者や菊池と日ごろ親交のある人たちへ配られた。谷口吉郎もその一人である。谷口は『木曽馬篭』を読んだ感想として次のように述べている(27)。

「文中、登場人物の言葉のはしはしに、本人の表情がありありと私の目に浮かんできて、まるで、映画の大写しを見ているように感じました。戦後のあのきびしい時に、よくもあんなにいい仕事ができたものだと、今も、一種の響きを覚えるほどです。」

谷口の他にも、藤村記念館の関係者として高畠達四郎などから手紙が届いている。また、画家の東山魁夷、山口蓬春、作家の網野菊、英文学者の福原麟太郎などからも書簡が届いている。

6. おわりに

『木曽馬篭』の執筆は、菊池の馬籠との交流の再開でもあった。刊行後、菊池は頻繁に馬籠など木曽路を訪れ取材を行った。そして、『木曽路の旅』(昭和42年)、『木曽妻籠』(昭和47年)を、それぞれ発表している。

昭和50年、菊池は脳溢血のため3年間の入院生活を送ることになる。退院後、菊池が足を運んだのは、故郷宮崎の曽木と馬籠である(28)。

昭和21年、藤村記念事業を成し遂げるために立ち上がった馬籠の有志達も、この時には菊池に負けず劣らず高齢となっていた。菊池は彼らを訪ねて昔語りに花を咲かせたのだろう、談笑する様子が写真に残っている(29)。馬籠は菊池の第二のふるさとになっていたのである。

最後に、本文で触れられなかった資料をいくつか紹介したい。

1つ目は、藤村の妻島崎静子からの書簡である(30)。藤村の死後、島崎家は箱根にある知人の別荘に疎開しており、大磯にある邸宅は無人になっていた。そのことを憂慮した島崎静子は大磯町長と相談して、大磯の邸宅の管理を菊池にお願いしたのである。

書簡中、「主人最後の書斎もいかなる運命に今後なります事か、それまでも菊池さんに御護りねがへれば此上なき事です」とある。藤村の葬式の時と同様に、島崎家の菊池に対する信頼を感じることのできる内容である。

2つ目は、昭和39年付の馬籠の末木利一からの書簡である(31)。菊池が馬籠を紹介する『藤村記念堂由来記抄』を執筆したことは既に触れた。この書簡は『藤村記念堂由来記抄』の発行部数や出版経費などについて打ち合わせる内容となっている。

末木利一からの書簡はこの一通しか現存していないが、『木曽馬篭』や菊池の日記から頻繁に連絡を取り合っていたことが窺える。

3つ目は、写真である。菊池は馬籠を文章に残すだけでなく、写真として残すことにも力を注いだ。『木曽馬篭』にはふるさと友の会の発会式の写真や、建築途中の藤村記念堂の写真などを随所に掲載している。そうした写真は、「定本　木曽馬篭　特にふるさと友の会員による藤村記念堂建築写真　附〈新建築〉誌」として、アルバムに収められている(32)。

その他、菊池が撮影したものを含めて、約70点ばかり馬籠など木曽路を映した写真が残っている。

謝辞

本稿において調査対象とした菊池重三郎関係資料は、菊池なつみ氏の御厚意によって、大磯町郷土資料館に御寄託いただいている資料である。改めて記して感謝申し上げる。

注

(1)　菊池重三郎『馬籠　藤村先生のふるさと』(東京出版株式会社、1946年)p.26、以下『馬籠』と略す。
(2)　『馬籠』p.31
(3)　『馬籠』p.56
(4)　現地案内板にて確認
(5)　『馬籠』p.122-125
(6)　昭和18年10月10日付菊池重三郎差出はがき(菊池重三郎関係資料1-250-4)
(7)　『馬籠』p.313
(8)　「なつみへ(第四信)昭和二十年四月十四日(土)夜」(菊池重三郎関係資料1-176)
(9)　「なつみへ(第七信)昭和二十年五月三日(木)夜記」(同1-176)
(10)　昭和21年2月6日付野田宇太郎差出書簡(同1-128-3)
(11)　昭和21年1月10日付野田宇太郎差出書簡(同1-128-2)
(12)　昭和21年11月15日付野田宇太郎差出書簡(同1-128-7)

(13)　昭和22年1月16日付野田宇太郎差出書簡（同1-128-4）
(14)　昭和21年8月17日付鈴木保徳差出はがき（同1-91-4）
(15)　昭和21年12月16日付曽宮一念差出はがき（同1-43-17）
(16)　馬籠本陣跡設計図（同1-255～1-259）設計図には「記念堂」と書かれているが、設計図作成時には、まだ施設の名称が定まっていなかった可能性がある。
(17)　昭和21年9月23日付谷口吉郎差出書簡（同1-217）
(18)　菊池重三郎『木曽馬篭　島崎藤村の故郷』（小山書店、1958年）p.76、以下、『木曽馬篭』と略す。
(19)　藤村記念郷編『藤村記念館五十年誌』、p.76-77
(20)　藤村記念事業　ふるさと友の会発起人名簿（菊池重三郎関係資料1-214）
(21)　有島生馬「馬籠まつり」。『木曽馬篭』中の記載箇所はp.191-194である。（同1-243）
(22)　昭和26年2月5日付島崎楠雄差出書簡　（同1-198）
(23)　木曽馬篭原稿（同1-36～39）4分割されているため、資料番号も4つに分かれている。
(24)　菊池重三郎日記　昭和33～34年（同1-284）
(25)　『木曽馬篭』p.223-227
(26)　獅子文六「序」（『木曽馬篭』の序文）（菊池重三郎関係資料1-245）
(27)　昭和34年1月6日付谷口吉郎差出書簡　（同1-193-3）
(28)　鈴木昇・佐川和裕編『叙情の人・菊池重三郎—よせられた書簡を中心に—』（大磯町郷土資料館、1989年）p.5
(29)　昭和53年4月、馬籠での写真（同2-35-6）
(30)　（昭和、年不詳）8月1日付島崎静子差出書簡（同1-82-2）
(31)　昭和39年8月22日付末木利一差出書簡（同1-125）
(32)　「定本　木曽馬篭　特にふるさと友の会員による藤村記念堂建築写真　附〈新建築〉誌」（同2-21）

参考文献

・菊池重三郎『馬籠　藤村先生のふるさと』東京出版社、1946年
・菊池重三郎『木曽馬篭　島崎藤村の故郷』小山書店、1958年
・鈴木昇・佐川和裕編『叙情の人・菊池重三郎—よせられた書簡を中心に—』大磯町郷土資料館、1989年
・藤村記念郷編集委員会編『藤村記念郷三十年誌』藤村記念郷、1979年
・藤村記念郷編『藤村記念館五十年誌』藤村記念郷、1997年
・藤村記念館編『図録　島崎藤村』藤村記念館、2009年

大磯地区に於ける本土決戦期の遺構調査Ⅱ

市原　誠
（戦時中の大磯に関する調査市民協力者）

1.　はじめに

第2次世界大戦末期の1945年（昭和20年）春以降、神奈川県中郡大磯町西小磯地区に米軍の本土上陸に備えた坑道が多数掘削された。本稿では、調査が終了した西小磯1号壕～ 4号壕の4ヶ所を掲載するが、いずれも総延長が長くなく比較的短期間で掘削作業を放棄したように感じられる。これらの壕が、いつどのような目的で誰が坑道（遺構）に向き合っていたのかを検証していくこととしたい。

坑道の名称であるが、大磯町郷土資料館学芸員の富田三紗子氏と協議した上で、便宜的に地名と単に実測した順に番号を付けて記録していくこととした。調査期間については、2019年（令和元年）11月13日、12月20日、2020年1月16日、3月19日の計4日間となっている。その後も調査を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて終了が早まってしまった。

2.　構築部隊と時代的背景

第2次世界大戦末期、相模湾正面における対上陸防御は第53軍(1)の管轄であり、その隷下師団である第84師団、第140師団(2)、第316師団の3個師団などが防禦陣地を構築中であった。当初、大磯地区は第140師団歩兵第402連隊(3)が主として布陣していたが、第3次兵備で第316師団が編成され追加配備されることとなる。そのため、本来であれば歩兵第402連隊は配置転換すべきなのだろうが、連隊長であった故鈴木薫二氏(4)の強い意向で上級司令部のみ変更という異例の処置となった。このような経過で、今日、巷で垣間見ることができる部隊配置図などでは、大磯地区は第316師団の布陣地域となっている。

しかし緊迫、混乱した時代背景の中で、上級司令部変更処置が各兵士に伝わっていたのかは未知数だ。実際に、この異例処置を語る証言者は僅かであった。

西小磯1 ～ 4号壕の掘削作業にあたった部隊であるが、歩兵第402連隊第4大隊第4、5、6挺進中隊と推測する。その根拠だが、同部隊は、当初、鷹取山拠点で陣地構築を鋭意行なっていたが、1945年（昭和20年）7月17日、縦深配備から水際配備へと作戦変更が発令された際に、新編の第316師団歩兵第351連隊が同拠点に進出することとなったため、配置転換を余儀なくされていた。故鈴木薫二氏も鷹取山拠点では自身の強い意向を通せず配置転換を受け入れざるを得なかったのか、師団司令部同士でどのようなやり取りがあったのか真相は不明のままである。

この作戦変更による周辺地域における同連隊の部隊配置を整理してみると、故清水孝氏(5)の証言を参考にして筆者が推測した域は出ないが、歩兵第402連隊の第1大隊は西小磯汀線、第2大隊は二宮から国府本郷汀線及び内陸部、第3大隊は千畳敷山周辺が布陣地であったと判断する。かつ生沢地区や西小磯地区の内陸部は、元々部隊空白地帯だったと思われるが、この地には第4大隊が進出したことと考えられる。歩兵第402連隊第4大隊所属の阿部義明氏(6)によれば、同隊は連隊内唯一の反撃大隊だったという。そのため、縦深配備から水際配備への作戦変更が行なわれても、汀から少し下がった丘陵地帯で陣地構築を始めたのだろう。ちなみに、阿部義明氏は、作戦変更後は鷹取山拠点から少し汀線に近付いた生沢地区で陣地構築の陣頭指揮を執ったと証言した。

本稿に収録した4ヶ所の坑道掘削部隊と掘削時期は、携わった当事者証言こそ得られなかった。しかし、阿部義明氏所属の歩兵第402連隊第4大隊が同連隊内唯一の反撃大隊だったため、1945年7月下旬以降に、汀線から一歩下がった反撃に適した場所で陣地構築を開始したと判断した次第である。しかし、終戦まで僅か2週間程度しかなかったため、いずれの遺構も小規模の半端な作りで放棄されていることと思われた。

その進出理由は、次章で述べることとしたい。

3.　西小磯1 ～ 4号壕の構築目的は？

いざ米軍が来寇した際に、大磯地区は本土防衛の最前線だったといっても決して過言ではない。大磯地区は歩兵第402連隊の本部もあり、付近の丘陵地帯には多数の重砲陣地も構築された。狭範囲の割に配備されている兵力が多いのが特徴である。有事の際は、大磯海岸からも米軍の上陸が高い確率であり得ると想定されたため、多数の本土決戦陣地が構築された。まず、米軍は西小磯海岸に殺到し、ここでは汀線陣地を敷いていた第1大隊が対応し、鷹取山拠点の24㎝榴弾砲陣地や吾妻山の14㎝加農砲陣地も盛んに火を噴いたことは容易に想像できる。それでも上陸し、内陸への侵攻を試みる米軍に対しては、生沢地区や西小磯地区内陸部（西小磯1 ～ 4号壕が該当）に構築された陣地で対応する戦術を想定していたのではなかろうか。

第4大隊の陣地構築は、終戦までにほとんど進捗していないため、全体像は掴み切れない。しかし、米軍来寇を迎えるころにはお互いの陣地の死角をカバーし合い効率的に反撃することが出来るまでに仕上がっただろう。その反撃は、米軍侵攻部隊に対して決して生還の望みがない斬り込みをかける以外の手法はなかったであろうし、その疑いの余地もない。

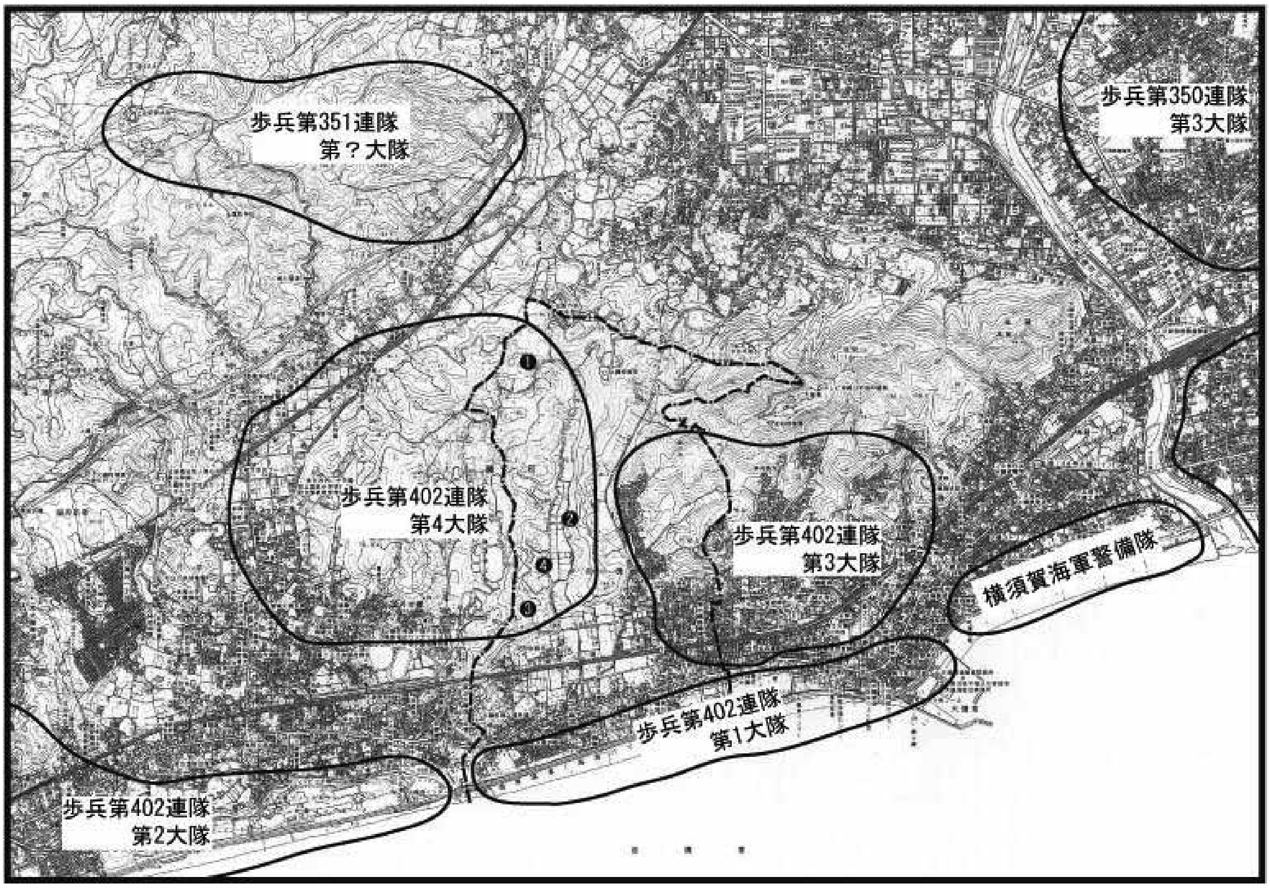

図 1　1945 年（昭和 20 年）8 月ころにおける大磯地区の歩兵連隊布陣図（推定により作図）
西小磯地区の❶〜❹は、西小磯 1 号壕〜西小磯 4 号壕の場所を表す。

❶西小磯 1 号壕

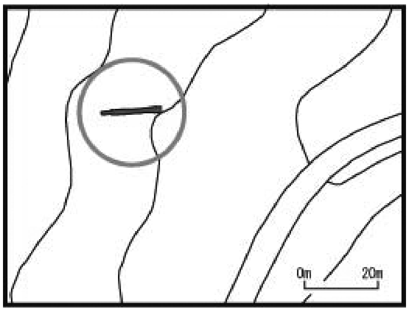

図 2　西小磯 1 号壕位置

写真 1　西小磯 1 号壕入口
2020 年（令和 2 年）4 月 15 日撮影

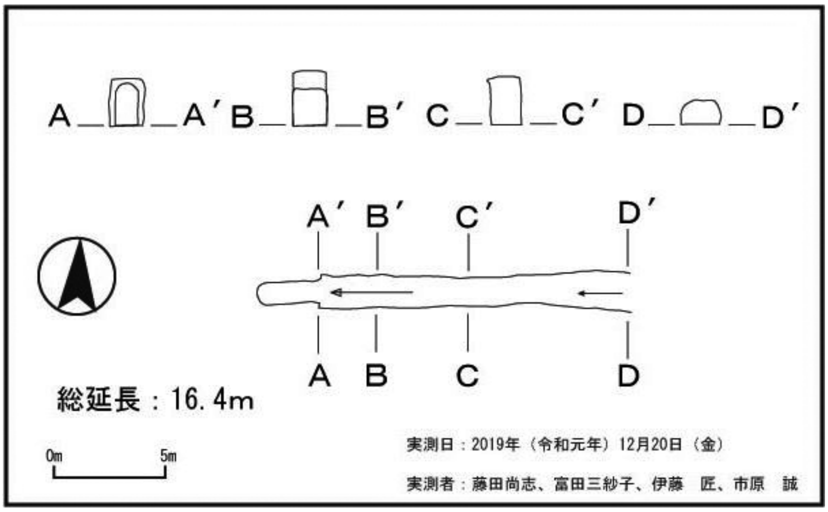

図 3　西小磯 1 号壕実測図

1 本坑道で、入口から奥に向かって緩やかな下り傾斜となっている。目立った崩落や湧水は、見受けられず内部は乾燥していた。綺麗に掘削されているため、一定以上の技術を持ち合わせた兵士が作業にあたったのだろう。

❷西小磯２号壕

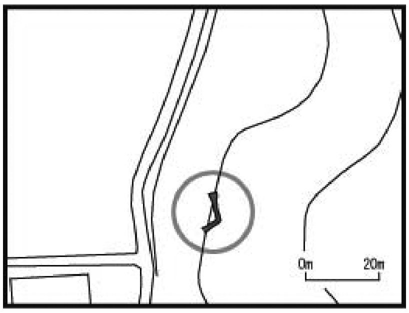

図４　西小磯２号壕位置

写真２　西小磯２号壕北側入口
2020 年（令和２年）４月 15 日撮影

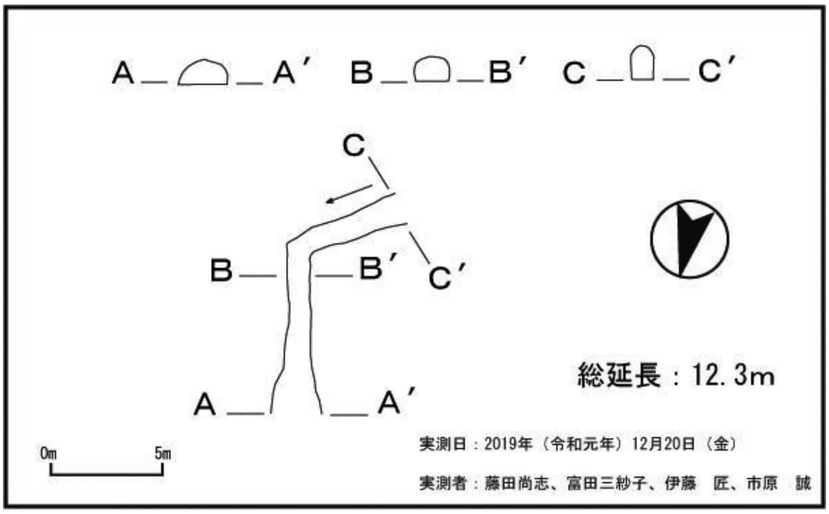

図５　西小磯２号壕実測図

Ｌ字型を呈する。目立った崩落、湧水ともに見受けられず。西小磯２号壕の使途は、この状態で完成しているとはいい難く半端な仕上がりのためはっきりしない。しかし、この壕が最大限活用されるときはもはや尋常ではない絶望的な状況は明らかだ。

❸西小磯３号壕

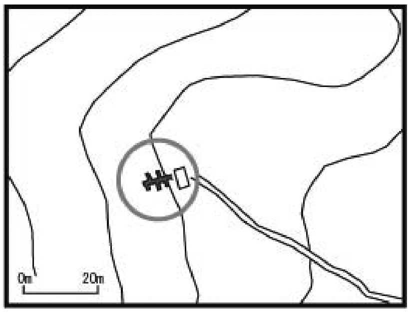

図６　西小磯３号壕位置

写真３　西小磯３号壕入口
2020 年（令和２年）４月 15 日撮影

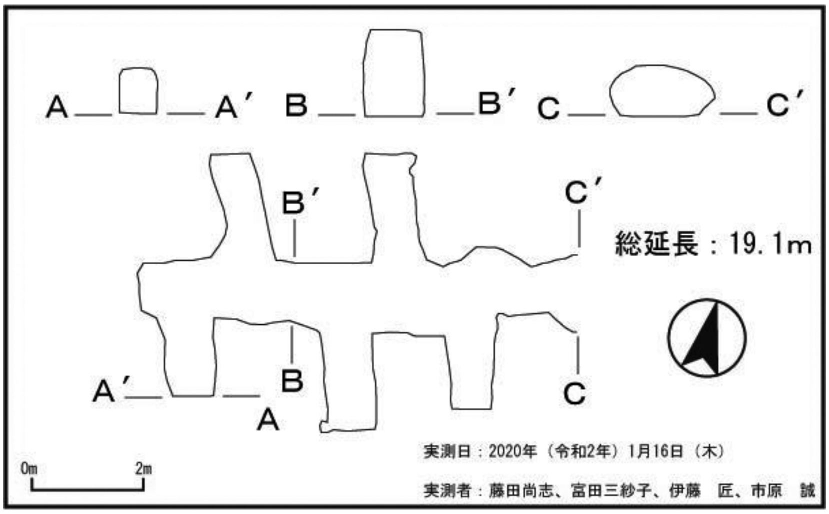

図７　西小磯３号壕実測図

当地を所有する方の話によると、軍の兵士が掘削したのは直線坑道のみだという。５つの部屋については、戦後、作物を保管するために掘削したものだという。作物の保管に活用されたことは確実と思われるものの、５つの部屋の掘削については、終戦時に完了していた可能性もある。

西小磯３号壕は、来寇した米軍を観測するには充分な見晴らしで、最深部には通気孔が準備されている。諸条件を考慮すると、５つの部屋は弾薬庫、通気孔はガス抜き穴で火力を伴う陣地である理屈が通る。

❹西小磯４号壕

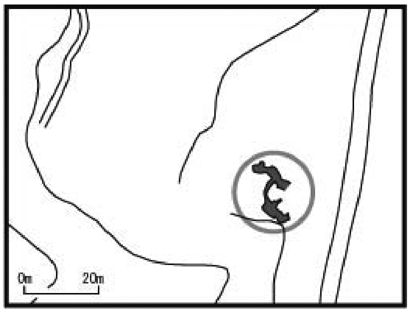

図８　西小磯４号壕位置

写真４　西小磯４号壕南側入口
2020 年（令和２年）４月 15 日撮影

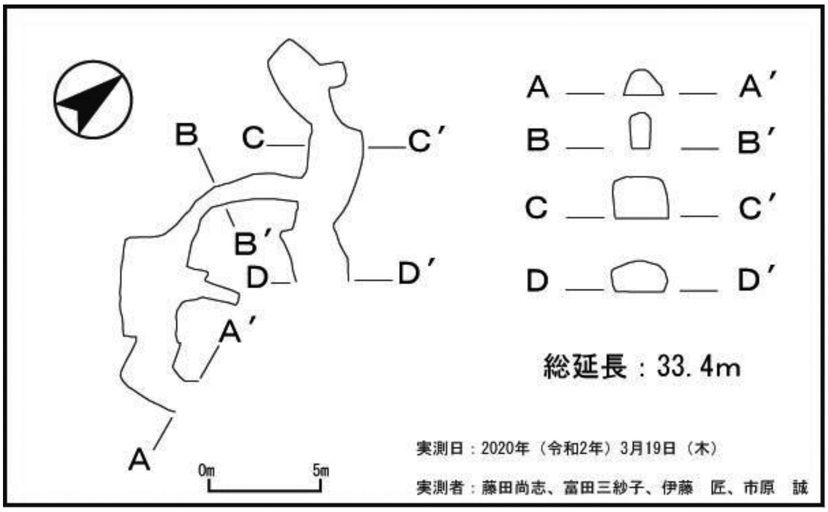

図９　西小磯４号壕実測図

推測だが、ＭＧ（マシンガン）陣地と斬り込み隊待機壕として両方の機能を考慮していたのだろうか。

実測図Ｄ付近は、ツルハシの掘削痕が見受けられず古墳を拡張した坑道であると思われた。しかし、大磯町郷土資料館が 1994 年（平成６年）に刊行した『大磯町の横穴墓群』には、西小磯４号壕が収録されておらず、戦時中の防空壕として処理された可能性がある。

現状は、実測図Ｃ付近から奥はコンクリブロックや石切り場から切り出された石が、多数保管してある。目立った崩落は見受けられず、湧水もなかった。

謝辞

本稿の執筆にあたり、阿部義明氏（元歩兵第 402 連隊第４大隊第６挺進中隊第３小隊小隊長）に、ご教示を賜った。改めて、感謝申し上げたい。

主要参考文献

・清水孝（『第 100 師団（鉄兵団）士官候補生・第 140 師団（護東兵団）新品少尉相集い共に大いに語らん哉』2000 年）
・市原誠（『近代戦跡考古学 22（軍装操典 101 号）』2010 年）
・市原誠（『近代戦跡考古学 51（軍装操典 140 号）』2020 年）
・市原誠「大磯地区に於ける本土決戦期の遺構調査」（『年報－平成 29 年度－』大磯町郷土資料館、2019 年）
・市原誠（『平塚市博物館研究報告　自然と文化 34 号』2011 年）
・市原誠（『平塚市博物館研究報告　自然と文化 43 号』2020 年）

注

(1)　1945 年（昭和 20 年）４月８日に編成された軍のひとつ。司令部は現厚木市玉川小学校にあった。軍司令官は、赤柴八重蔵中将。

(2)　陸軍師団のひとつ。1945 年（昭和 20 年）２月 28 日に東京で編成。司令部は、片瀬にあった。

(3)　1945 年（昭和 20 年）５月２日に甲府で編成された。

(4)　1893 年（明治 26 年）１月６日、兵庫県にて出生。陸士 25 期。1945 年（昭和 20 年）４月２日、第 140 師団歩兵第 402 連隊の連隊長に着任。最終階級は、陸軍大佐。戦後は、Ｂ級戦犯となり重労働終身刑の判決を受ける。1952 年（昭和 27 年）６月 17 日、東大病院にて胃癌にて逝去。享年 59 歳。

(5)　1925 年（大正 14 年）7 月４日生。陸士 58 期。陸軍少尉。終戦時は、大磯海岸布陣。2012 年（平成24年）3 月６日逝去。享年 86 歳。筆者がもっとも、ご教示を頂いた方の１人である。生前の氏の強い意向で、筆者に散骨するようにいわれており、その遺言を受け入れた。遺言通りに某所に散骨を果たす。

(6)　1924 年 11 月 16 日生。御年 95 歳。第 140 師団歩兵第 402 連隊小隊長。陸軍少尉。戦時中から教職に就く。最終は、公立小学校校長。筆者は、現在も非常に近しくご指導を頂いている。

わく、中国製造原料の豊富さや、労働者の勤勉さ、賃金の低廉を利用し、日本の事業管理の経験、理論、技術をあわせて合弁事業を経営すれば必ず成功するだろうとしている。また、竹内は日中の国交において、中国語や中国の文化に詳しく、中国の事情に精通しているもので、中国人と親密な交際ができる日本の一流の外交家を中国駐在公使とすることが望ましいと説いている。

以上の内容からは、吉田が外交官として中国に赴任中、竹内と連絡を取り合い、意見を交わしていた様子がみてとれる。また、竹内と吉田の中国に対する姿勢は、経済面では一致していたが、他方中国の政治情勢に対する日本側の対応という点においては、意見を異にしていた。これは、中国を未だ大国とみなす竹内と、中国はすでに外部からの介入なしには統一しえないとする吉田の認識の違いに由来するものだといえるだろう[8]。

注

(1) 吉田茂と竹内綱との関係については、代表的なものとしてジョン・ダワー『吉田茂とその時代』(中央公論社、一九九一)や猪木正道『評伝吉田茂1　青雲の巻』筑摩書房、一九九五)、原彬久『吉田茂—尊皇の政治家—』(岩波書店、二〇〇五)に概説的に取り上げられている。また、竹内が吉田の思想に及ぼした影響については、中西寛「吉田茂のアジア観—近代日本外交のアポリアの構造—」(『国際政治』第一五一号、二〇〇八)に詳しい。中西は中国の大陸経営という点における竹内と吉田の思想の共通点を指摘しているが、竹内と吉田の直接的なやり取りを示す資料が乏しいため、竹内の自伝(「竹内綱自叙伝」吉野作蔵編『明治文化全集』第二二巻、日本評論社、一九二九)や『日本外交文書』(外務省)に収録されている吉田の電文などを援引し、論を展開している。この他竹内と吉田の関連資料としては、竹内綱の長男明太郎の日記が高知工業高等学校同窓会編『工業ハ富国ノ基—竹内綱と明太郎の伝記—』(一九九七)に一部収録されており、日記には吉田が竹内綱や明太郎に自身の進路や養父吉田健三から引き継いだ事業の売却など種々の相談事をしていた記述がある。

(2) 前掲「竹内綱自叙伝」及び朝鮮総督府鉄道局編『朝鮮鉄道史』第一巻(朝鮮総督府鉄道局、一九二九)。

(3) 明治四二年一一月二九日伊集院彦吉宛牧野伸顕書簡(社団法人尚友倶楽部ほか編『伊集院彦吉関係文書』第一巻、芙蓉書房出版、一九九六)では、「竹内綱氏五月中旬御地へ到達之予定にて南清より旅行を始められ申候間、到達被致候はゞ何卒宜敷御世話被下候様奉願上候。清国には余程興味を有し高年に似合はぬ元気有為之人に御坐候」とあり、牧野から伊集院に竹内を紹介している。

(4) 前掲牧野伸顕書簡

(5) 前掲「竹内綱自叙伝」

(6) 吉田茂『回想十年(下)』中央公論新社、一九九八(初出は一九五七~五八年)

(7) 大正四年八月十日付寺内正毅宛吉田茂書簡(吉田茂記念事業財団編『吉田茂書翰』中央公論新社、一九九四)

(8) 日本の対中政策に関する吉田の考えは、戸部良一「吉田茂と中国」(吉田茂記念事業財団編『人間吉田茂』中央公論社、一九九一)、佐藤元英「吉田茂の奉天総領事時代—対満蒙政策の思想と行動」(『近代日本の外交と軍事—権益擁護と侵略の構造—』吉川弘文館、二〇〇〇)や前述の中西論文などで詳しく論じられている。

効〔功〕ヲ期スヘキナリ
日支之国交ニ就キ切「希」〔抹消〕望スルハ第一支那駐在公使ハ日本第一流ノ外交家ニシテ支那「ノ」〔抹消〕文学言語ノ素養アツテ支那ノ事情ニ精通シ「スル者ニシテ」〔抹消〕支那人ト親密ノ交際ヲ為シ得ヘキ者タラサル可ラサル事トス、然ルニ従来支那駐在公使之其人不得而已ナラス今日々在ツテ朝野官民共多クハ其誠ニ支那之事情ニ精通スル者ニ無キハ遺憾之至ニ有之候、近来学者ニ者支那ニ対スル著述有之候へ共見ルヘキモノハ内藤佛次郎之支那論而已歟与者存候
右不取敢申上度草々不備
十二月三〇日　綱
茂殿
筆ニ任セテ記し候者ニ付雑読有之度候也

【解説】

この書簡は、前述の書簡【二】の約二か月後に竹内から吉田に送られた。冒頭では、一〇月時点で結婚予定と書かれていた竹内廣の結婚式が、つつがなく執り行われたと書かれている。

次に、竹内は「日支親善ニ付纔ニ意見之趣致承知候」と書いており、この書簡の前に、吉田が竹内に対し日中の親善についての意見を述べていたことがわかる。竹内は吉田の意見を「其許之意見ニ対し而者一見候処余程粗暴之考有之候」と吉田の意見のうち一見して、粗暴だと考えられるものもあるので、「教思付之侭左ニ申上候」と、思いついたままを教え、以下のように申し上げると述べている。それ以降の文章は、吉田の意見を取り上げ、それに対して竹内が考えを述べる形式をとっている。

まず、最初の話題は「帝政問題ニ付キ袁〔世凱〕ヲ助ケ我ニ帝政樹立之功ヲ収メ云々」とあるように、袁世凱の帝政問題について論じている。一九一五年末の段階で、袁は民政から帝政への転換を企図し、「皇帝」の地位に就任した直後だった。吉田が竹内に袁の援助をするよう意見している一方、竹内は袁の帝政への援助を標ぼうするのは「頗ル考慮ヲ要スヘキ問題ニシテ容易ニ断スヘカラズ」とあるように、慎重な態度をとっている。竹内は続けて、みだりに中国の国体の得失について干渉すべきではなく、しばらく中国の情勢を注視し、大勢が定まってから援助しても決して遅くはないと述べている。吉田が日本の中国への積極的な干渉を主張している一方で、竹内は内政干渉にあたる行為は慎むよう、慎重な立場をとっていることがうかがえる。なお、袁の帝政運動は各地の軍閥の抵抗に遭い、翌年三月には帝政の廃止に追い込まれた。同年六月に袁自身も急逝し、事態は急展開を迎えることとなる。

次いで、「満州ニ於ケル帝国ノ地位勢力ヲ強大ニシ北京之死命ヲ制スル云々」とあるのは、吉田が満洲における日本の地位勢力を強大にして、北京政府の急所を押えるなどとの意見を述べている部分である。これに対し竹内は「右者日支親善協力一致シテ共存自衛東亜之平和ヲ維持セント欲セハ、威嚇手段ヲ以テ成効〔功〕セントスルハ大ナル誤謬ト言ハサルヲ得ズ」、すなわち東アジアの平和を維持しようとするならば、武力的手段を用いて解決を図ろうとするのは大いなる間違いであると強い口調で吉田の意見を否定している。ここで竹内はヨーロッパ諸国の例を挙げ、対外交渉における外交的手段と武力的手段とを比較している。竹内は、イギリスやフランスの中国割譲の状況をもって「此国際ノ正義ニ非ラサルナリ」と述べており、日本の外交（本文中では「国際」とある）は正義でもって始終不動の主義とするべきであると言っている。

一方、日中の経済関係については、吉田と竹内の意見は一致している。竹内は「日支経済関係云々ハ大体ニ於テ賛成ナリ」と述べており、竹内い

前に吉田から寺内に送られた書簡[7]には、「張〔錫鑾〕将軍及張〔元奇〕巡按使両官ニ面談之砌日支関係の現状に顧ミ両国政治家の往来意思疎通益々肝要之次第を説き、先つ今秋京城共進会を機会として寺内総督訪問之事を勧説」（〔〕内は筆者注）とある。吉田は京城共進会（＝始政五年記念朝鮮物産共進会）の名目で、日中関係改善のため、寺内と北京政府側の高官とを引き合わせようとしていた。このように、吉田やその周囲で、当時急速に悪化しつつあった対中関係の改善に向けた動きがあったということが、これらの資料から読み取れる。

後半にかけて書かれているのは、竹内家の近況である。「廣事茨城之開墾地農業ニ従事為致積」とあるのは、竹内の七男廣のことで、廣が茨城県の開墾地で農業に従事するつもりであったところ、竹内の出身地である高知県宿毛の押川光躬（元自由民権運動家）の次女と結婚し、宿毛に居住することになったとある。廣に同行した人物の虎治は廣と同じく竹内綱の息子で、三男にあたる。なお、文中にでてくる「茨城之開墾地」だが、これは一九一三年に竹内綱・明太郎親子が中心となって開発した、牛久農場のことであろう。

【二】吉田茂宛　竹内綱書簡　〔一九一五〕年一二月三〇日付

〔封表〕消印4．12．31　支那満洲安東県日本領事館　吉田茂殿

〔裏〕東京市麻布区笄町百四十二番地　竹内綱　十二月卅日

本日廿日之書簡相達披見候、時下寒威日増難凌候処相揃健全抃喜之至ニ候、爰許一同平安省念可有之候

廣義去ル廿七日吉日ニ付、結婚式首尾能相済候趣電信報知有之、大ニ御祝致候

陳者日支親善ニ付纔ニ意見之趣致承知候、右ニ付而者不捨置講究申上有之候処、其許之意見ニ対し而者一見候処余程粗暴之考有之候、殊ニ相考当職之身分旁甚関心不少候ニ付而者教思付之侭左ニ申上候

帝政問題ニ付キ袁〔世凱〕ヲ助ケ我ニ帝政樹立之功ヲ収メ云々、右者支那ノ統一政治之速カニ成立セシムヘキハ固ヨリ異議ナキモ、今日ニ於テ直チニ帝政ノ援助表榜セントスルハ頗ル考慮ヲ要スヘキ問題ニシテ容易ニ断スヘカラズ、抑支那之革命帝王ノ交代ハ殆ント普通ノ慣例ノ如キ観アルモ国民ハ決し而之ヲ随喜スルモノニ非ス

君民間ニ於ケル正義ハ古ヨリ伯夷叔斎文天祥方孝孺ノ如キ大ニ尊崇セラル、所ナリ、今日帝政再迭ニ於テ如何之結菓〔果〕ヲ可見歟、逆睹スヘカラス、我ハ妄リニ国体ノ得失ニ就キ干渉スヘカラス、暫ラク国民一般ノ趨向ニ注意シテ其大勢ノ定マルヲ見テ之ニ援助スルモ決シテ遅キニ非ラルナリ、若シ然ラスシテ帝国ノ成リ立ニヨリ大ニ騒乱ヲ来スカ如キアラ〔リ〕テハ危険甚ント云フヘキナリ

満州ニ於ケル帝国ノ地位勢力ヲ強大ニシ北京之死命ヲ制スル云々

右者日支親善協力一致シテ共存自衛東亜之平和ヲ維持セント欲セハ、威嚇手段ヲ以テ成効〔功〕セントスルハ大ナル誤謬ト言ハサルヲ得ズ、此ヲ列強ノ外交ニ見ヨ、露西亜ノ満州鉄道大連旅順ノ租借、独乙ノカイゼルノ「トルコ」ニ於ケル懐柔策ヲ以テ今日ノ戦争ニ参加セシメシカ如キハ威嚇ヲ以テ得スルニ非ス、偶独乙ノ膠州湾租借ノ如キナキニ非サルモ之カ為メ英ノ威海衛仏ノ廣州湾ノ要求トナリ支那ヲシテ憤慨已ム能ハサラシム、此国際ノ正義ニ非ラサルナリ、日本ノ国際ハ正義ヲ以テ終始不動ノ主義トナサル可ラサルナリ

日支経済関係云々ハ大体ニ於テ賛成ナリ、我国官民ハ商工農業其区々タル利権獲得ヲ放念シテ、支那製造原料ノ豊富労働者ノ勤勉労銀ノ低廉ヲ利用シ、我ノ事業管理ノ経験学理技術ト相待ツテ合弁事業ヲ経営セハ必スヤ成

婚致候筈相談相整、先月虎治廣同道宿毛ニ参リ彌十二月十二日結婚者事ニ取極申候、宿毛ハ祖先墳墓之地邸宅も有之事ニ付、廣之住居与致候へハ至極安堵致候次第ニ御座候

右申遣度草々不備

十月念〔廿〕八日　綱

茂殿

尚以虎治ハ廣伴ニ先日帰リ十二月結婚之節再度宿毛行之筈、廣も宿毛屋敷ニ滞留致居申候也

【解説】

まず書簡の前半で述べられている「朝鮮鉄道一千哩記念」は、一九一五年に朝鮮総督府が開催した「始政五年記念朝鮮物産共進会」の行事のひとつである。朝鮮半島における鉄道網の敷設は、一八九四年に日本と朝鮮との間で締結された京釜及び京仁鉄道に関する暫定条約を嚆矢とする。日本は朝鮮半島での鉄道敷設権を徐々に獲得し、京仁線、京釜線、京義線などが敷設された。これらの鉄道網は一九〇六年に日本で鉄道国有化法が施行されたのち、朝鮮総督府が管轄する官営の朝鮮鉄道となった。

竹内は一八九五年、当時の首相であった伊藤博文に京釜京仁鉄道株式会社の設立趣意書を提出し、朝鮮半島における鉄道敷設の重要性を説いた(2)。その後京釜線や京義線の敷設に携わり、京釜鉄道株式会社の常務も務めている。竹内が当時の朝鮮総督であった寺内正毅から記念行事への参加を求められたのは、こうした経緯からであろう。

文中で竹内は寺内からの招待を断り、別に北京行きを計画している。その目的のひとつが「日支交渉結末以来」北京における重要人物の偵察である。ここで登場する「日支交渉」とは一九一五年一〇月に書かれた内容であることを踏まえると、同年一月一八日、大隈重信内閣が中華民国の袁世凱政権に対して提示した対華二十一ヵ条要求を指すと考えられる。前年夏に勃発した第一次世界大戦のさなか、日本はドイツと交戦し、ドイツの租借地であった膠州湾、青島、山東鉄道を占拠した。日本はこれらの山東権益の承認や、すでに日本の租借地となっていた南満州権益の租借期間延長、さらに中国政府における日本人顧問の設置などを中国に求めた。中国側は日本の要求に対し当初抵抗の姿勢を示したが、五月九日に一部の条項を除き要求を受諾した。しかしながら、これは、中国の対日感情を悪化させ、中国のナショナリズムを刺激する結果をもたらした。こうした状況下で、竹内は牧野伸顕や伊集院彦吉らと相談し、「北京当路者」の内情をさぐるべく中国行を検討していると書簡には書かれている。なお、北京の要人が誰を指すかは不明であるが、北京政府大統領であった袁ないし政府高官であったと考えられる。

ここで名前が登場する牧野は、一九一三から一四年まで第一次山本権兵衛内閣の外務大臣を務めており、対華二十一ヵ条要求を行った加藤高明外相の前任にあたる。さらに伊集院も一九〇八から一九一三年まで駐清・駐華公使を務めた。いずれもこの時期の対中外交に関係した人物である。この二人が対華二十一ヵ条要求で悪化した日中関係を憂慮していた様子がうかがえる。なお、竹内と牧野は吉田と牧野の長女雪子の結婚（一九〇九年）により姻戚関係となったが、伊集院も牧野の義弟にあたり、竹内と伊集院は牧野の紹介で知り合ったようである(3)。一九〇九年伊集院に宛てられた牧野の書簡で、竹内が清国を視察するので伊集院に竹内への便宜を図るよう依頼している(4)。また、竹内の自伝にもこの時の清国外遊の記述があり、伊集院を通じて北京政府の高官と面会している旨が書かれている(5)。

一方、この時期吉田は朝鮮総督府の書記官を安東領事と兼務しており、朝鮮総督であった寺内正毅とは密接な関係にあった(6)。竹内の書簡の二カ月

【資料紹介】吉田茂宛竹内綱書簡

久保庭　萌（当館学芸員）

一　吉田家旧蔵資料と書簡の概要

本稿では、当館が所蔵する吉田茂関連資料のうち、吉田の実父竹内綱から吉田に送られた書簡二通を紹介する。当館所蔵の吉田宛竹内書簡は合計五通あるが、紙面の都合上すべてを掲載できなかったため、残り三通については別の機会に改めて紹介したい。

今回紹介する資料は元々吉田茂が所蔵していたものであり、吉田の没後に吉田健一が受け継いだ。二〇一七年に吉田家から吉田茂関連の資料を一括して寄付いただき、現在整理を進めている。資料のなかには、吉田茂宛の書簡が五百通余り含まれており、吉田の行動や思考の一端を探る上でも貴重な資料といえる。なお、財団法人吉田茂国際基金が刊行した『吉田茂書翰』（中央公論新社、一九九四）及び続刊の『吉田茂書翰　追補』（中央公論新社、二〇一一）には、吉田茂から差し出した書簡が合わせて一四〇四通収録されているが、他方吉田宛の書簡は、まとまった形では公開されていない。また、竹内綱宛吉田茂書簡は、書簡集にも収録がなく、今回紹介する竹内の書簡に対応する吉田の返書も、管見の限りでは発見できていない。

今回紹介する書簡はいずれも一九一五年に作成されたもので、吉田が安東領事と朝鮮総督府書記官を兼任していた時期にあたる。吉田は外交官として、一九〇七年に中国の奉天領事館に領事官補として赴任以来、一九一〇年代から二〇年代にかけて中国北部の領事及び総領事として、日本人居留民の保護や現地における情報収集などの業務に携わった。

一方、竹内綱（一八四〇～一九二二年）は土佐藩出身の自由民権運動家で、一八九〇年の第一回衆議院議員総選挙に当選し、自由党土佐派の主要メンバーとして、衆議院議員を計三期務めた。竹内は政治家であると同時に実業家としての顔も持ち、グラバー商会からの支援を受けて同郷の後藤象二郎とともに現在の長崎県にあった高島炭鉱の経営に携わるなど様々な事業を手掛けた。また、今回紹介する書簡にもあるように、朝鮮半島の鉄道網敷設にも深く関わっていた。

竹内と吉田の関係、あるいは竹内家と吉田との関係は未だ明らかになっていない部分も多い(1)。竹内の書簡は両者の関係を探る上でひとつの手がかりを与えるものである。

二　書簡の釈文と解説

【一】吉田茂宛　竹内綱書簡　〔一九一五〕年一〇月二八日付

此ノ手紙ハ去八日郵便発送致候積之処、机之引出ニ忘レ有之今日見出候ニ付、其侭郵便ニ付し申し候

念〔廿〕二日之手寰〔簡カ〕披見秋冷之好時節相揃安全之由拝賀之至ニ候、爰許一同万事省念可被致候、陳者京城之朝鮮鉄道一千哩記念ニ付総督より之案内且参列者之誘引も有之、明太郎とかも頻リニ被相進候へ共、自分ハ御祭騒キノ見物者好ましからす、別に北京行之企有之旁朝鮮行差控候事ニ致候、実ハ日支交渉結末以来日支親善之意見有之、秘密ニ同憂者ニ（牧野伊集院両氏ニも）相談致居申候而、目下北京当路者之内密を観察為致申ニ有之候、其都合ニ依リ而ハ北京行ニ致積ニ有之候自分之意見之緒言ノミ別紙之通ニ有之候、一覧之上意見有之候へハ内察被申越度候

廣事茨城之開墾地農業ニ従事為致積之処、本年押川光躬出京之節相続人之幼年ニ而家事之世話致候者無之ニ付、虎治を宿毛住ニ致候度相続有之ニ付、其後廣を宿毛住居ニ致し候、押川之養子（事故有之離縁）之次女を廣と結

年　報

令和元年度

◇　令和 2 年 8 月 28 日発行
◇　編集・発行
大磯町郷土資料館
〒 255-0005　神奈川県中郡大磯町西小磯 446-1
TEL　0463(61)4700　　FAX　0463(61)4660